
ISアスラン戦記

桂かつら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISアスラン戦記

【Nコード】

N9728Y

【作者名】

桂かつら

【あらすじ】

あのユニウス戦役から数ヶ月、アスランは事故に遭う。しかし、アスランは死ななかった。

これはアスラン・ザラが異世界で繰り広げる彼の戦記。

第1話 アスラン異世界に立つ

始まりはいつも突然だ。

俺ことアスラン・ザラがこの世界に来てから早1ヶ月が過ぎ去った。

日記をこうして書いている訳だが色々と思うところがあるのも事実だ。

だが、俺はこの日記を書いている。

元の世界を忘れない為に。

事のあらましはカガリと喧嘩別れをした次の日のオーブ軍での演習中に事故に遭い気が付いたらベツトの上だった。

最初が病院かと思ったが違うみたいだった。

俺は混乱する頭を何とか平常に戻し、体の状態を確認した。

体調は良いのに心が晴れないのはカガリと喧嘩別れした挙句に事故に遭ったと言う何とも情けない自分を認識しなければならぬ事が心を重くした。

そんな時だった。

織斑 千冬が現れたのは。

彼女は唐突に自己紹介を始める。

「私の名前は織斑 千冬。このIS学園の教師をしている」

そう言ってきたのだ。

最初は学校に海岸沿いの学校に墜落したのかと鬱になったが演習は海上で行っていたからそんな事が無い筈だと心を落ち着かせた。

そして、自分も織斑先生に挨拶をした。

「自分はオーブ首長国防軍参謀本部所属、アスラン・ザラ准将であります」

つくせで役職と階級を名乗りながら敬礼をしてしまった。

軍人の礼儀を一般市民が何処まで理解してくれるか不安ではあったが軍人の挨拶を一般人にする。

ここまで来ると最早職業病である。

俺をマジマジと見ながら織斑先生はこう呟いた。

「あんな物に乗っていたのだから軍人とは思っていたが……その若さで一国家の参謀本部の准将とは……優秀なのかコネなのか判断が付かないな……」

その言葉に俺は苦笑した。

まあそれもそうだろう。

僅か18歳で参謀本部の准将閣下なのだ。

コネといわれても致し方無い。

そして、織斑先生の言葉で俺は思い出した。

「ジャステイス！！ 俺の機体は！？」

今ここに至って、俺は自分の愛機を思い出した。

そして、織斑先生が言ったIS学園なる学校についても疑問を感じた。

矢継ぎ早に質問する俺を織斑先生は何とか落ち着かせると順を追って説明してくれた。

先ず、IS学園とは『IS』インフィニットストラトスなる機動兵器に関連した技術取得の為に各国が融資する日本国内に設けられた専門高等学校であると言う事。

ISとは希代の天才科学者にして天災科学者、篠ノ之 束なる科学者が開発した宇宙空間における活動を目的としたマルチフォーマルスーツであり、その兵器的側面が各国に注目され軍事目的に利用されている事。

何故かISは女性にしか起動する事が出来ず、何時の間にか『女尊

男卑』なる風潮がこの世界にはある事。

しかも、ISの要であるコアユニットは篠ノ之博士にしか生成は不可能で博士自体がコア開発を中止しその数が467個しか存在しないとの事。

その為、各国の政府や一部の国から認可されたIS関連企業がISコアを独占しISの開発を行っている事などだ。

その話を聞いて俺は何とも脆弱で脆い軍事システムだろう。MSみたいにOSさえ適合すれば訓練しだいでナチュラルだろうがコーディネーターだろうが関係なく乗れると言うのに。

そして、ある疑問が沸き起こる。

何故、『俺にその様な話をするのか？』と言う疑問だ。

その疑問を問いただした時、織斑先生が鋭い目付きをする。

俺はここからが本題である事を理解した。

何故ならあの時の彼女の目は歴戦の戦士の目であり、もし俺が良からぬ輩で何かこの学園に危害を加えるなら容赦しないとその目が訴えていた。

だがしかし、彼女も存外にお人好しだ。

不振な侵入者である俺に何の拘束も見張りも着けずこの様な医務室に放置するのだ。

しかも一応は治外法権が認められているこの重要施設でだ。

俺の世界では考えられない。

しかも、対等の条件で話をする為に護衛もつけずに俺と一対一で話をしている。

本来ならこういう場合は最低でも護衛を一人、戸口に一人つけるのが普通だ。

ソレすらない。

しかも監視カメラや收音マイクすら存在しない。

何とも甘い。

ソレが俺が彼女に抱いた第一感情であった。

そして彼女は俺の愛機、インフィニットジャスティスの事を説明する。

彼女の話では突如として、18メートルの巨体がISの訓練を行うアリーナに落ちてきたらしい。

その衝撃で近くの職員室の窓ガラスと廊下のガラスが多数粉々に割れたそうさ。

拳句の果てにアリーナの観客席とシールド発生装置がお釈迦で修理するより新しく作り直す方が早い程の被害を出したそうさ。

ざっと見積もっても修繕費が約2億3千万円だそうだ。

不幸中の幸いは今は冬休みで生徒は帰省して殆どいなかったし、墜落したアリーナには人がいなかった事である。

ソレを聞いた瞬間、確かにコレは状況が最悪である事を認識した。

幾ら防御最強のIS技術を応用したシールドでも高さ18・9メートル、重さ79・67トンが遙か上空から落下すれば壊れるに決まっているらしい。

昨日から厄日だ。

カガリと喧嘩別れするわ、演習中に事故るわ、今度は多額の借金が追加だ。

俺は天を仰いでこう言った。

「神よ……俺に何か怨みでもあるのか……？」
と。

その後の話で何とか俺は俺がこの学園に被害を加えるつもりは無い事を理解してくれた。

後、俺の事情も話した。

ジャスティスの所在を問いただした。

その時の織斑先生のあの当惑した。

何と言っただら良いのやら解らないと言っ表情は忘れられない。

そんな顔で彼女はこう言った。

「ジャステイスだったかあのロボット……いやモビルスーツか……
兎に角、お前の機体はだ……」

「俺の機体は……？」

「ISになっちゃった」

流石の俺もこの時ばかりは間の抜けた声を出してしまった。

「兎に角、明日、見に行くぞ。今日はここで寝ろ」

そう言われ俺は織斑先生が出て行った後こう言った。

「本当に厄日だ……」

と。

そして、眠れぬ夜を過ごした後、俺は早朝、織斑先生に連れられて。

地下にある研究スペースに案内された。

そこで俺が見た物は、

ジャステイスが約2から3メートルにまで縮小された姿だった。

しかもPS装甲はダウンしている状態でビームライフルとビームキヤリーシールドをその手に持って立っていた。

「ジャステイス……こんなミニマムになってしまって……」

俺はそんな言葉しか掛けられなかった。

「いや、突っ込むところコ!? もう少しあるだろ!? 何でISになったとか、本当にコレ俺の機体?とか!!」

織斑先生の突っ込みを他所に俺は真面目に話した。

「確かに見た目はジャステイスだが……動くのか?」

「ボケて真面目な話に無理やり戻すな!! まあ、いい……結論から言えばお前が乗れば動く。しかも、高度なロックが掛かっていて、ディスプレイには『アスラン・ザラ以外の搭乗は認められない』と言う画面まで出てきた」

織斑先生は俺に向き直りこう言った。

「つまり、お前にコレを動かしてもらいたい」

俺はその言葉にこう言った。

「つまり、俺にISが動かせる。と?」

その言葉に織斑先生が頷く。

「ああ、お前は人類で2番目に男でISが動かせる。動かす代わりに日本政府がお前の借金をチャラにするし、戸籍や身分証まで発行してくれる」

借金を盾に脅しか。

拳句、身寄りの無い異世界で身分まで保証とは。

よほど男でISが動かせるのは希少価値が高いらしい。

「さらに来年の四月からIS学園にお前は通ってもらおう」

俺の意見は無しですか？

「無論あるとでも？」

心を読まないで!？

こうして、俺ことアスラン・ザラの異世界での生活が始まった。

第1話 アスラン異世界に立つ（後書き）

うん、何だろコイツ、全然アスランじゃないみたいだ……
きつとカガリと別れて精神が病んだのだろつきつと。

第2話 アスラン辟易する

俺は取り敢えず自分に宛がわれた部屋でパソコンを弄りながら考える。

「力をファクションか何かと勘違いしているなこの世界は……」

俺ははISの各国の操縦者達がファクション雑誌のモデルを飾るのをパソコンで見ながら溜息を吐いた。

「力を持ったその時から何時しか自分も破壊者となるものを……こいつ等は理解しているのか？ 有事の際はこいつ等が真っ先に戦場へ行かなければならんと言っのに……」

俺は指揮官として見た場合、こんな兵力としては最高だろうが融通の利かない兵器に意味があるのかと言っ事に対し疑問に思った。

しかし、一番の疑問は篠ノ之 束に尽きる。

「何がしたいんだ？ 彼女は……」

唯、世界を悪戯に混乱させた挙句、自分は雲隠れ。

「利と害がのつりあいが取れてないぞ……」

もういい加減そんな事を考えていると時間になった。

「さて、入学式に行くか……」

俺はすっかり重たくなった腰を椅子から離すとIS学園へと向かうのだった。

恙無く入学式が終了し、1年1組の教室に俺が入ると皆の視線が俺を突き刺した。

正直、コレはキツイ。

(まるで珍獣扱いだ……)

俺はそんな事を考えながら自分の名札がある席に座る。

サ行の席だからまあ、真ん中ら付近だ。

俺の近くにもう一人の男でISが操縦出来る織斑 一夏がいた。

(彼か……織斑先生の弟で俺より先にISを動かした男と言うのは……)

俺がそんな事を考えていると山田 真耶先生が教室に入ってきた。

山田先生のたどたどしい挨拶も終わり自己紹介が順当に進んでいく。

しかし、織斑 一夏はボウとしていたのか山田先生の呼びかけに気付き、名前を名乗った。

しかし、名前だけしか言わず暫くの沈黙の後、

「以上です!!」

には流石に俺も呆れた。

(他に言う事があるだろうに……)

その時、織斑先生が織斑 一夏を叩き倒し、自分の自己紹介を開始した。

黄色い悲鳴で揺れる教室。

そして、また自己紹介が再開される。

そして、俺の順番が巡ってきた。

女子の視線が一段と強烈に俺を突き刺した。

「皆さん初めまして。自分の名前はアスラン・ザラといます。皆さんとは2年違いの18歳ですが、どうか気にせずフランクに話していたければ幸いです。趣味は機械工学とドライブで今もっている車はアルファアルファロメオのGTでカラーリングは赤です。好きな色は赤色で得意なスポーツはドイツ流西洋剣術が得意です。1年間、よろしく願います」

その自己紹介の後に一瞬の静寂。

そして、

何とか織斑先生の怒声で事態の收拾を見たが休み時間が地獄だった。

廊下側の窓際には他のクラスや2、3年生の姿があった。

聞き耳を立てると、

「マジかつこいい〜！！ しかも私達より年上だし」

「あの子もなんか年下で良いわね……」

「織斑君のかつこいいけどザラ君のかつこいいわね……」

（正直、視線が辛い……）

俺がそんな事考えていると織斑 一夏が俺に声をかけてきた。

「あの、初めまして、俺、織斑 一夏って言います」

その自己紹介に俺は嘗ての後輩でシン・アスカの面影をその少年に見た。

（懐かしい感覚だ）

そんな感傷を無理やり脇へ追い遣り、改めて自己紹介をした。

「そんな堅苦しくならなくていい。俺の事はアスランでいいし、敬語もいいよ。改めて、アスラン・ザラだ。よろしく」

そう言いながら俺は織斑 一夏に握手を求めた。

「それじゃあ、俺のことは一夏、改めて宜しくアスラン」

そう言い頭をかきながら握手を返す一夏。

その様子に周りの女子が色めき立つ。

「いい！！ いいわ！！ 男同士の友情！！ 凄く絵になるわ！！」

「ガチBLEキタコレ！！」

「シヤメで保存ですね。わかります」

「ぐへへへ……」

「ザラ様が攻めよね！？」

「織斑君も捨てがたいわ！！」

俺は思わずこう思った。

(俺は……間違ったのかな……この学園に入る事を選択した事を……)

と。

「何か……いずらいな……」

一夏のその台詞に俺は万感の想いの丈を込めてこう言った。

「ああ」

と。

その後、篠ノ之 篤が現れ、一夏を借りて何処かに行ってから、この801空間と言うか乙女空間に晒される破目になった。

休み時間も終わり、授業を開始する。

山田先生が教団に立ち教鞭をとる姿は正に教師の姿だ。

俺はその姿にヤツパリ教師なんだなと失礼なことを思いながらデエスク備え付けのタッチスクリーン型画面に筆記していく。

「とまあ、ISに関する説明はここまでです。この時点で何か質問はありますか？」

その質問に誰も挙手しなかった為に山田先生は暫く生徒を見回した後、一夏を当てた。

「ん〜それじゃあ、織斑君、何か質問はありますか？」

その問いかけに一夏は脂汗を掻き始める。

「えっと……あの……その……」

「？ 何ですか？ 織斑君？」

観念したのか一夏は蚊の羽音並みに小さな声で答えた。

「全体的に解りません……」

「へ？」

もう一夏はヤケクソ気味に言う。

「全体的に解らないんです」

ソレを聞いた山田先生は唸るような声を上げた。

「ぜ、全部……ですか……」

「はい……全部です……」

その言葉に織斑先生が一夏に語りかける。

「織斑、お前、入学前に読むテキストを読んでいないのか？」

その質問に一夏は思い出したように答えた。

「ああ、あの分厚い教本？ 読まずに捨てたけど？」

その言葉を聞いた瞬間、織斑先生は強烈な拳骨の一撃を一夏の頭に

見舞った。

アレは痛いぞ。

音からして痛い。

「イツ!？」

「馬鹿者! あれに必読と書かれていただろうが。まったく……ザラ、この馬鹿にISについての基本を教えてやれ」

俺は織斑先生の指示に従い暗証した事を言う。

「ハイ、IS『インフィニット・ストラトス』は宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォームスーツです。ISを形成するパーツは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISAーマーから形成されています。また、その攻撃力、防御力、機動力は非常に高いが故に『究極の機動兵器』と呼ばれています。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることは殆どありません。また、ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出すことができ、さらに、ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ実行へと移せます」

俺の説明に感心したように頷く山田先生と対照的に当然だと頷く織斑先生。

「その通りだ。織斑、コレくらいは教本を暗記していれば誰でも理解できる内容だ。後でテキストは再発行してもらえ」

三時間目が終了し、俺は一夏にノートを貸してやり説明をしながら教えていく。

「とまあ、こんな所だ。コレが基本だからここさえ抑えておけば応用が利く」

その説明に一夏は頷きながら俺にお礼を言った。

「サンキユなアスラン。正直、俺一人なら途方に暮れていたぜ」

そんな時だった、金髪を優雅に靡かせながら一人の少女が俺達に語りかけてきた。

「そこの二人、よろしくて？」

それもかなり高圧的な態度で。

「ん？」

「は？」

その俺達の返事が御気に召さないのか少女は何と無礼なと言わんばかりに俺達に言い放った。

「まあ！？ 何ですの、そのお返事！？ 私に話しかけられるだけ

でも光栄なのですからそれ相応の態度と言つものがあるのではないのかしら?」

悪いが、俺は君みたいな礼儀を守らない子供に礼儀を尽くす謂れは無いのだよ。

一夏は少女を見ながらこう言った。

「悪いな……俺、君の事知らないし……アスラン知ってるか?」

「いいや、知らないな……」

俺達の回答に信じられないと言わんばかりに彼女は俺達を捲くし立てた。

「まあ!? 私を知らないのですの!?! イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを!?!」

知らない者は知らないし、一々、高々代表候補生の名を知る必要など無い。

しばらく一夏は熟考した後、セシリアに問いかけた。

「なあ、一つ質問いいか?」

「ハン、下々の者の要求に答えるのは貴族の務めですわ。よろしくてよ」

オルコットは優雅な振る舞いで一夏の質問に答えようとする。

「代表候補生つて……何？」

その瞬間、聞き耳を立てていた周囲の女子は盛大にすっ転び、セシリアは転びそうな状態を自前の優雅さで押しとどめた。

しかし、器用な女だ。

俺は右手をやりながらヤレヤレと言いたげに頭を左右に振った。

仕方ない、爆発しそうだから一夏に教えるか。

「代表候補生はな、各国のIS操縦者の候補生として選出される奴等で、国家やスポンサーたる企業から専用ISを与えられる。その国の代表選抜に参加することができる者達の事だ。当然、ISはコアが限られているからその席も少ないその狭き門を通りぬけた奴等だ」

その説明にセシリアは目を光らせ誇らしく語る。

「そう！！ 限られた、一握りのエリートですわ！！」

だが、所詮は候補であって代表ではない。

さらに代表とは1人、本当に狭い門を潜り抜けた1人がなる権利がある。

高が代表候補生で其処まで自分を喧伝できるオルコットの厚顔さに俺は呆れた。

少なくとも山田先生は自身が凄腕の代表候補生であったにも関わら

ず“所詮”と切り捨てている。

だからこそ俺はそんな謙虚な山田先生を人として尊敬できる。

織斑先生も自身がISの世界大会、モンド・グロツソで総合優勝を飾り、『ブリュンヒルデ』と呼ばれているのにソレを誇る気は更々無い。

本当の優れた人は自分の栄光や経歴を声高には叫ばない。

行動で示しているからこそ、彼女達を俺は尊敬できる。

俺はオーブの准将だが其処まで自身の肩書きに興味は無い。

あくまで行動と結果が全てであってソレが国や世界を平和にすると言ふ信念があつたから戦えた。

俺はオルコットが立ち去るまでそんな事を考えていた。

第3話 アスラン決闘を申し込まれる

HRの時間、クラス対抗戦のクラス代表を決める事になった。

「先生、代表は織斑君がいいと思います！」

一人の女子の発言に他の女子も同意した。

「い！？ 何で俺！？」

一夏が慌ててそう言うが周りの雰囲気が一夏が代表でいいだろうと言う雰囲気になっていた。

ふむ、面倒事から解放される。

俺がそんな事を考えた矢先、一夏が俺を巻き込んだ。

「せ、先生！！ 俺はアスランを推薦します！！」

一夏！！ 俺を巻き込むな！！

周りのクラスメイトもソレはソレでありかもといった雰囲気になりつつあった。

そんな時だった。

オルコットが声高に叫んだ。

「その様な選出は認められませんわ！ 男がクラス代表なんていい恥曝しですわ」

恥曝しときたか。

其処まで言うか普通？

お前には常識と配慮が足りないみたいだ。

それでもまだオルコットの言葉は止まらない。

「この様な屈辱をこのセシリア・オルコットに1年間味わえとおっしゃるのですか！？ 大体、文化としても後進的な国で過ごさなければならぬ事事態、耐えられない苦痛ですわ！！」

その言葉に流石の俺もつい口が滑った。

「ほう？ ではその文化としても後進国からISコアを恵んで貰っているのは何処のどの国かな？」

その言葉にオルコットの口が金魚みたいにパクパクと動いた。

その顔は怒りに満ち溢れている。

「イギリスが先進国なら今の発言が文化的で優雅な発言とでも？ フツ、なら俺はそんな人や国を罵倒する文化など興味も魅力も感じんな。没落しても無駄にデカイプライドを持ち続ける。だからジョンブルは衰退した。そんな過去の黴臭い栄光にしがみつくくらいな

らいつその後進国で俺は十分だ」

その言葉に我慢なら無いばかりにオルコットはキレた。

「あ、あ、あ、貴方！！ 私と私の祖国を侮辱しますの！？」

「フツ、自分の発言は棚に上げてその言い草。笑わせる。もし人の悪口を言うならば自分に帰ってくる事を予期しろ。まさか、自分が一方的に言えると思ったか？ 悪いが俺は自分の友が馬鹿にされているのを黙って見ているほど優しくはないぞ」

オルコットはどうやら我慢の限界だったらしく怒り狂いながら人差し指を突き出し、俺に宣戦布告してきた。

「け、決闘ですわ！！」

俺はその言葉に自分の中に抑えていた感覚が解き放たれるのを感じた。

“ソレ”が目を覚ました。

“戦士としての自分”が。

セシリアはアスランの沈黙を見て怖気づいたと思った。

(フン、所詮、男などこの程度ですわ)

セシリアは生前の父親を思い出した。

母親にオベツカを使い卑屈に振舞う父親。

女尊男卑が明確になった時など更に卑屈になった。

目の前の男も同じように卑屈になった。

そう思っていた。

しかし、ソレはセシリアの勘違いだった。

「ほう？ ならば、討たれる覚悟は出来てるんだろうな？ セシリア・オルコット？」

アスランがそう口にした瞬間、世界が変わった。

比喻でも例えでも無い。アスランを中心に世界が変わった。

心臓を直接鷲掴みにされた様な感覚。

背中には今まで流したことのない量の冷や汗。

肌は鳥肌がたち。

唇は震えが止まらない。

そのくせ体は動かないのだ。

セシリアは周りを見たとき殆どの生徒が震えながら泣きそうな顔をしていた。

中には呼吸困難なほど荒い息をして泣いている生徒までいた。

あの幕ですら震えを必死で押しとどめて耐えていた。

一夏は椅子にへたり込む。

真耶は半泣きになりながら震えていた。

千冬はその額に冷や汗を薄っすらと流した。

(誰ですの!?! “アレ”は!?!)

今まで温厚だが嫌見たらしい男と思っていたアスランがセシリアには化け物に映った。

そして、セシリアの本能が告げる。

“アレ”と戦うな!

“アレ”の前ではお前は無力そのものだ!

“アレ”から今すぐ逃げろ!

“アレ”はお前にとって死そのものだ!

しかし、セシリアは自身のプライドがその本能をねじ伏せた。

(お、男に、私が男に圧倒された!?! このセシリア・オルコット

が!? ふざけないで!! 私は代表候補生ですよ!? ソレをこの様な男に圧倒されたなんて!?)

セシリアはその屈辱を怒りに変えてアスランに言い放った。

「じよ、上等ですわ!! この私が貴方を倒してさしあげますわ!!」

そこですかさず千冬が命令した。

「オルコットとザラが戦いその後勝った者が一夏と戦う。ソレで異存は無いな」

その言葉にアスランは放っていた何かをその内に押し込め、元のアスランに戻った。

「解りました」

「解りましたわ!!」

それに何とか気を取り直したセシリアが今までの恐怖をかき消す様に了解の声を上げた。

やれやれ、コレだけ脅しても立ち向かうか？

俺も大人げ無かったしクラスの奴等には申し訳ない事をしたな。

しかし、この世界のIS乗りはプライドが高過ぎるぞ。

俺は席に静かに座ると溜息をソット落とした。

第4話 アスラン決闘に臨む

俺はオルコットから決闘を申し込まれ早一週間が経過した。

その間、一夏のISがまだ到着しないとかでその長さになってしまった。

俺はその間取り敢えずISの訓練と肉体鍛錬を行った。

一夏は篠ノ之に剣道で叩きのめされていた。

一夏、骨は拾ってやるからな。

さて、俺と一夏と筈はアリーナの管制室横にある操縦者待機室に俺と一夏はISスーツを着た状態で座っていた。

『ザラ君、オルコットさんのISはブルーティアーズ、第三世代型ISで両肩のビット型射撃兵装ブルーティアーズに大型特殊レーザーライフルスターライトmk?に高周波振動ナイフインターセプターです。解りましたか?』

山田先生の言葉に俺は無言で頷いた。

『ザラ、お前とお前のISが本気を出せばオルコットを殺しかねない。そこで今回、お前のISに追加のリミッターを設ける。リミッターの内容は全ビーム兵装の出力50パーセントカット、装甲強度の50パーセントカット、PIC起動出力50パーセントカット、

更にセンサー有効範囲と感知能力の50パーセントカットだ。問題は？』

その内容に俺ではなく一夏と篠ノ之が納得できないと言わんばかりに詰め寄った。

「千冬姉！？ 幾ら何でもソレはやり過ぎだ！！」

「そうです！！ ザラに装備劣化した得物を持たせて両手両足縛り上げて重りまでして目隠しして戦場に出ると！？ 対等ではありません！！」

その言葉に千冬は憮然として答えた。

『学校では織斑先生だ！ 馬鹿者！ 正直、これでも手加減になるかどうか解らん。更にハンディをつけたいくらいだ。悪いが織斑、篠ノ之。ザラは下手したら学年最強どころか学園最強だろう。多分、そんな男に今のオルコットが挑んでも秒殺だ』

その言葉に一夏と篠ノ之が俺をマジマジと見た。

『ソレとザラ、決して殺すな。人死にはゴメンだ。殺しそうになったら止めに入る。いいな？』

俺は織斑先生の言葉に無言で頷いた。

さて、ジョンブルのお嬢様が首を長くしてお待ちかねだ。

俺は右手を掲げる。

その瞬間、右手中指の赤い指輪が赤い輝きを放つ。

そして、俺の周囲から光が晴れた瞬間、其処にはインフィニットジャスティスを装備した俺がいた。

それを見た一夏と篠ノ之は驚きの声を上げた。

「か、かつこいい……何か騎士みたいだ……」

「ふ、全身装甲！？ フルスキン しかし、P I Cが背中に一体化しているISなど聞いたことも見たことも無い。それに色が灰色？ 塗装がされていないのか？」

俺は一夏の驚きを背に俺はジャスティスを歩かせる。

「見せてもらおうか……イギリス代表候補生の実力とやらを……」

俺はそんな事言いながらカタパルトのロックを思考制御でロックした。

俺はP I Cの出力を最大にする。

ジャスティスはそれに答えるが如くファトウム01のスラストノズルが輝きを増す。

『進路クリアー、ザラ君、発進どうぞ！！』

その言葉に俺は前を見据える。

「アスラン・ザラ！ ジャスティス出る！！」

俺はオルコットが待つ戦場へと飛び立った。

セシリアはアスランが来るのを待っていた。

眼窩にアスラン側のピットを見つめながら待つこと数分。

発進許可の青ランプが点灯する。

「来ましたわね……」

オルコットは自分に屈辱を与えた男をどう処断すべきかを考える。

しかし、彼女の思考は真っ白になった。

突如、灰色の全身装甲が速度で飛び立ったかと思えば、灰色は美しいローズピンクに近い赤に染まった。間接部は太陽に反射し白銀に光り輝く。

後ろのPIICを広げたその姿は騎士がマントを棚引かせてる印象すら受ける。

赤い鎧を纏った騎士。

観客はそう思った。

「う、美しい……」

セシリアは我知らずそう呟いた。

一夏と筈はその様子を見ていて啞然とした。

「い、色が変わった……」

「何なのだ……あのISは……」

そう、コレこそが、アスラン・ザラが乗機にしてC・E・接近戦最強の機体。

インフィニットジャスティス。

今、異世界にISとして再誕した。

「な、何ですの!?! そのISは!?!」

セシリアが金切り声でその機体の名を問い出さした。

アスランは静かに、噛み締める様にその名を言い放った。

「インフィニットジャスティス」

「無限の……正義……」

セシリアはつわ言の様にその和訳を口にした。

俺は左腰のビームサーベルを引き抜き、右腰にあるビームサーベルの柄頭と握っているビームサーベルの柄頭を連結させソレを引き抜く。

その瞬間、桃色の超高熱の刃が左右のビームサーベルの先端から吐き出された。

そして、左腕に持たせた盾を正面にすると同時にビームサーベルを腰溜めにする。

そう、俺がアンビデクストラス・ハルバードで構える得意な構えだ。

オルコットもライフルを構える。

その時だった。

突如のロックオン警告。

刹那、俺は体を左に少しスライドし頭を左に傾ける。

「開始の戦鐘も鳴っていないのに発砲か？ 余裕も優雅さも無いな…
…戦場ではないんだぞ？ 少しは礼儀を守れ、オルコット」

俺のその言葉にオルコットは微笑みながらこう言った。

「あら、挨拶ですね。挨拶。中々良い挨拶だったでしょ？」

不意打ちが挨拶とは、戦場では確かに儀礼的な物を持ちこまない。試合と戦場は違う。確かにセシリアはワザトロックオンをして馬鹿丁寧にユツクリ狙いを定めて撃った。俺の実力を測るためか。

味なマネを。

まさか3歳も年下に試されるとは。

『オルコットさん、競技は開始されていません。ペナルティーとしてシールドエネルギーを射撃分引いておきます』

「自由……」

山田先生のペナルティー宣告にも優雅に答えたか。

余裕か？

だが、ソレが戦場では命取りと教えてやる。

『それでは、アスラン・ザラ対セシリア・オルコットの試合を行います』

俺は改めてビームサーベルを構え直す。

セシリアもライフルを構える。

『始め!!』

山田先生の声と同時に俺達は動き出した。

先手はオルコットだ。

光学兵器、粒子の尾を引いていなかった事からレーザーだろう。

ブリッツと比べるのもおこがましい程の低出力レーザーだ。

話にならない。

ジャステイスのVPS装甲が100パーセントの出力なら簡単に防げる火力だ。

50パーセントでも精々装甲表面に黒い焦げ目が付くくらいだ。

たいしたダメージにすらならない。

が、

このまま勝つても機体性能が良かったから勝てたと言われそうだ。

仕方ない。

圧倒的で言い訳が許されない程の勝ち方で勝つか。^{インパクト}

そう思いながら俺はキラが飛んできたビームをビームサーベルで切り払っていた事を思い出す。

(フ、ソレもまた面白い)

そう考えた俺は飛んできたビームを回避するのを止めて相手の銃口、

目線、腕や肩の筋肉の動きを備に観察しながらビームサーベルを振るう。

その瞬間、レーザーは弾き返され地面に激突した。

私ことセシリア・オルコットは今、とんでもない物を見た。

スターライトmk？から放たれるレーザー弾を事もあろうにあの男は光る剣で叩き落としたのだ。

（じよ、冗談ではありませんわ！？ そんな事ある訳！！）

そう考えながら今度は頭部に狙いを定めて発砲した。

しかし、あの方は、光る刃を巧みに操りレーザーの起動を反らして見せました。

（何て化け物ですの！？ 私の射撃をいとも容易く！！）

つまりは光と同じ速度で飛んで行くレーザーをあのお男はいとも容易く反応するという事。

人知を超えた剣技ですわ。

私は覚悟を決めると同時に自分がアスラン・ザラを舐めていた事を

この場で詫びますわ。

俺はオルコットの気配が変わった事を感じ取った。

フン、やる気かいだろう。

俺は一旦オルコットから距離を取った。

「貴方が初めてですわ。ここまで私を追い込んだのは……」

その言葉と共にセシリアはライフルの銃口を俺から反らした。

「だから……貴方に敬意を払い……」

次の瞬間、浮遊している左右のパーツから2本ずつの計4本の何か
が高速で動き出す。

「本気を出させていただきますわ!!」

そして、ソレは俺の周りを高速に不規則に飛び回る。

成る程、ドラグーンいやビットか。

俺はそのビットのオールレンジ攻撃を全て回避してみせる。

正直、眠くなるオールレンジ攻撃だ。

フラガ少佐、いや今はフラガ大将か、やキラやレイと比べたら余りに単調で鈍重で効果的でないビット運びだ。

正直、あの3人のドラグーンの運びはレベルは未来予知のレベルに近い回避するのにも一苦労だ。

しかもセシリアみたいに棒立ちではない。ちゃんと此方の攻撃を回避しつつ本体も攻撃をするのだ。

それに比べると甘すぎる。

「当たらなければどうと言う事は無い」

俺はビームサーベルでビットを一つ切り払う。

切断と同時にビットに背を向け次のビットを破壊。

背中と同時に2つの爆発が響く。

「二つ!」

そして、俺の近くを通るビットを切り払う。

「三つ!」

そして、最後は頭部、胸部バルカンで撃破する。

「四つ!」 終了

そう言いながら俺はオルコットに向かう。

後はコイツだけ。

しかし、オルコットは自分の切り札を落とされたのに微笑んでいた。

まだ切り札を隠しているらしい。

「残念でしたわね？ ブルーティアーズは後2機あってよ！！」

そう言うとオルコットの腰から砲身がせり上がる。

そして、放たれる。

しかし、俺はソレをバレルロールしながら連結していたビームサーベルを引き抜き二刀流にして擦れ違い様に切り裂いた。

そして、オルコットのわき腹を横薙ぎにする。

緊急に絶対防御が展開されるがソレすらひび割れる。

そして、1秒後、ブザーが鳴り響く。

『セシリア・オルコットのシールドエネルギーエンプティイにより
勝者、アスラン・ザラー！！』

フム、1分かまあ、時間が掛かったが許容範囲内。

俺はそう思いながらセシリアに手を差し出す。

「オルコット、大丈夫か？」

俺の問い掛けにオルコットは力なく頷いた。

そして、意を決した表情で俺に問いかける。

「なぜ腰のライフルを使いませんでしたの？ そうすれば攻撃のバリエーションにも幅ききますのに？」

その質問に俺はこう答えた。

「ソレも考えたがやはり俺の得意分野で戦わないとお前も納得しないだろ？ だからさ」

その回答にセシリアは目を大きく見開く。

「その為に戦略の幅を狭めたと!？」

「ああ」

その言葉にオルコットは笑った。

悲しくも可笑しそうに笑った。

俺はオルコットが心配になって声をかける。

「オルコット？」

「セシリア」

「へ？」

「セシリアで結構ですわ。その代わり貴方の事をアスランと呼んでも宜しくて？」

俺はそう微笑みながら問いかけるセシリアに笑顔を向けながら言う。

「ああ」

何故かセシリアが頬を赤くしているが本当に大丈夫だろうか心配になつて俺の額を彼女の額に合わせる。

「ヒヤン！？」

セシリアは可愛らしい悲鳴を上げる。

「フム、チョット熱いぞ？　大丈夫か？」

「だだだだだ大丈夫ですわ！！　どうしようもなく大丈夫ですわ」

言葉が怪しいがまあいい。

『コラ！！　貴様等何時まで其処にいるつもりだ！！　オルコット、貴様は失格だから外へ出る！！』

織斑先生の怒声で俺とセシリアの会話はここまでとなった。

第5話 アスラン女難の始まり

所変わって一夏と篤は如何したものかと考えていた。

一夏は半分絶望、半分諦めの表情がその目を支配していた。

「なあ、篤……俺、今からあんな化け物と戦うんだよな？」

その何とも頼りない表情に篤は激をとばした。

「戦う前から諦めて如何する!？」

しかし、次の一夏の言葉に流石の篤も押し黙る。

「じゃあ、俺がアスランに勝てる確率はあるのか？」

「それは……」

「だろ？ しかもアスランは射撃兵装があるんだぜ？」

「じゃあ、懐に飛び込めば!！」

その言葉に一夏は呆れながらも溜息を吐いて言う。

「たとえ潜り抜けられたとしても、あのレーザーすら弾き返す変態剣術の餌食だぜ？ さっき、オルコットに言ってただろ？ 得意な剣で戦ったって……それって接近戦はアスランの土俵だぜ？ 同じ

土俵で戦うとしたら物を言うのは技術と経験と力だ。俺とアスランじゃあそのどれもアスランには敵わねえ」

何時までもウジウジ悩む一夏に箒は怒鳴る。

「戦う前から戦いを放棄して如何する！？ 幾らザラが頭抜けていても相手は同じ人間なんだ！！ 確かに理論的にはお前の勝利は万に一つも無いかもしれない。でも、ソレを理由に戦いを放棄するなどお前らしくも無い！！ 思い出せ！ 一夏！ 私が虐められていた時、お前は数の暴力に屈したか！？ 私を見捨てたか！？ 違うだろ！！ お前は私を殴られながらも助けてくれた！！」

その言葉を聞いて一夏の瞳に力が宿る。

「私はそんなお前だから……！！」

途中まで言いかけた言葉を箒は飲み込んだ。

一夏の様子が変化した事に気が付いた。

「悪りい……忘れてたぜ……箒……ハハ……確かに俺らしく無かったわな……何相手が強いくらいで諦めてんだ？ 情けねえ……こんな事じゃ千冬姉に申し訳ないぜ……腹は決まった。後はアスランの装甲に俺の刀を浴びせる！」

その言葉に千冬の名しか入っていなかった事に不服を感じながらも箒は一夏を自分が出る限りの笑顔で見送った。

「ああ、行って来い！ そして勝て！！」

「ああ!!」

2人とも馬鹿じゃない。2人とも勝てない事は先刻承知。ただ2人には敗北の悲壮感も強者への恐怖も無い。

あるのは前を向いて勝利を掴むと言う意思だけだった。

俺は腕組をしながらアリーナ中央に陣取っていた。

アリーナ観客席は喧騒の渦に包まれている。

しかし、一夏の奴、遅いな。

そう思った時だった。

一夏がピットから勢い良く飛び出してきた。

俺は一夏の瞳を見た時、内心驚いていた。

(ほう……勝負を諦めてはいない様だな……いい目だ)

ソレは腕組みを止め手を下ろすと、一夏に語りかけた。

「準備はいい様だな？」

一夏は俺をその強い眼差しで見据えながらはつきり言い放った。

「ああ、何時でもいいぜ!!」

そう言うと一夏は刀型のデバイスを取り出し、構える。

俺はリアスカートにマウントしていたビームライフルを取り構える。

『それでは、第二回戦！ アスラン・ザラ対織斑 一夏の試合を開始します』

お互いがお互いを見据える。

『始め!!』

その声と共に俺達は加速した。

千冬と真耶はこの試合をモニタリングする為にモニターを中止していた

そう、この試合は日本政府とIS委員会の求める試合だった。

「それにしても相変わらず射撃も上手いですね、ザラ君は……」

その言葉に千冬も頷いた。

「ええ、その射撃能力だけを見ても世界トップクラスの射撃能力でしょう。オルコットの様に棒立ちの射撃とは訳が違う。超高速で動き回りながらも牽制射撃ですら確実に当ててくる。アレをシールドエネルギーを消費せずかわすのは困難に近い」

千冬は知らない事だがソレをかわして尚且つ反撃出来る存在はいる。無論、ソレはC・E・での世界の話だが。

「織斑君……勝てるでしょうか……？」

真耶のその言葉に千冬はスッパリと切り捨てた。

「今の所は那由他の彼方でしょう」

一夏は10の60乗すら超える確立で敗北する。

千冬はそう言ったのだ。

「幾らなんでもそれは……」

ありえない。

そう言いかけて真耶は口をつぐんだ。

解っているのだ。

アスランはどんなに格下でも油断しないし手も抜かない。

圧倒的な力でねじ伏せる。

確かにセシリアには射撃兵装は殆ど使わなかった。

しかし、ソレはセシリアに圧倒的敗北と自身の力を理解させる為と言う勝利条件を満たす為だろう事は真耶も理解している。

つまり、一夏にはそんな制約が無い。ならば射撃兵装もふんだんに使う事だろう。

「しかし、織斑の目は死んでいない。あるいは一太刀浴びせられるかも知れません」

真耶はその千冬言葉を聞きながらモニターを見つめた。

一夏は焦っていた。

（クソ！！ 解っていたけど。隙が全然無いばかりか射撃が鬼の様な弾幕と正確無比な射撃だぜ！！）

しかし、次のアスランの台詞で心が折れそうになった。

「一夏！！ こんな手緩い牽制射撃すら避けられないのか!？」

(これで手緩いのかよ!?)

一夏は回避するが確実に回避先に先回りしたようにビームの嵐が吹き荒れる。

「馬鹿野郎!! 回避は最小限で相手の目線と銃口、肩の動きを見て即決で回避しろ!!」

「そんな超人的な事出来るか!!」

一夏はそう叫びながらも突撃を開始するが。

やはりアスランの射撃が待っていた。

「馬鹿野郎!! 猪突すれば何とかなるとでも思ったか!? 相手との距離を詰める場合はジグザグに動きながらかく乱しつつ高速で近付け!! ソレか相手の認識外の速度で動け!!」

アスランの怒号はアリーナ内に響く。

その時だった。

突如白式は輝きを放つ。

「ファーストシフトか……いいだろう、次の段階に移る」

アスランはそう言いながらビームライフルをリアスカートにマウン
トしビームサーベルを引き抜いた。

さて、俺の教えを何処まで一夏が学習して行動に移せるかだな。

そう思いながらアスランは一夏を待った。

一夏の持っていた刀型デバイスが突如割れて青白い光の刃を形成した。

そして、俺と一夏は打ち合う。

鏢迫り合いをする俺達。

どうやらこの世界でも鏢迫り合いは可能らしい事に俺はホットした。

俺達の世界のビームサーベルはミラージュコロイドの応用でビームの刃を形成している。

その為、C・Eのビームサーベル同士がぶつくと双方の磁場が干渉し合って刃が維持できなくなる。

しかし、干渉が途切れると即座に刃が形成される。それ故に刃を干渉させたまま、斬りつけるのに有利なポジションの取り合いの為、お互い距離を取ったり、クルクル回りながら有利なポジション取りをしている。

それ故に、ビームサーベルで斬り結んでる時の機動は独特だ。『相手が振ったビームサーベルの延長線上から常に機体を外す』コレが基本的な動きとなる。

と、されていたが、戦闘データを見る限りでは最初にC・Eでビームサーベルの鏢迫り合いを演じたデュエルとストライクにはそんな現象は起きなかった。

更に、俺が乗っていたイージスとキラのストライクの対艦刀でも切り結ぶことが出来た。

更に言うならプロビデンスとストライクでもビームサーベル同士で切り結ぶ場面が何度もあった。

更にインフィニットジャスティスのグリフォンビームブレードでシオンが投げたブーメランも蹴り弾いたことからこの仮説は覆された。

俺は興味本位でビームサーベルとビームサーベル同士を切り結ばせてみた。

切り結べた時間は大体1分位だった。

その後、ビーム同士の磁場が干渉し合いすり抜けた。

つまり、1分以内なら切り結ぶ事が可能である。

しかし、1分も切り結ぶ事など実戦ではあり得ない事からもこれは許容範囲内であろう。

余談は兎も角、俺達が切り結ぶ刃と刃がスパークして放電している。

桃色の刃は衰えを知らず強い力を放っている。

一方、白式の方は何だか光が弱々しくなっている。

その時、白式のブレードが消えた。

「へ？」

一夏は啞然としながら自分の剣を見つめる。

俺は剣を引き、一旦一夏から離れた。

そして、ブザーが鳴り響き、山田先生が終了を告げた。

『織斑君のシールドエネルギーエンプティーにより勝者、ザラ君！』

何とも後味の悪い終わり方である。

その後、一夏と箒と一緒に織斑先生から聞いた話では一夏の剣は『雪片式型』といい更に一夏は何時の間にもやらワンオフアビリティーを発動していた。

その名も『零落白夜』と言うそう。

こいつが発動すればエネルギー性質のものであればそれが何であれ無効化、消滅させる白式最大の攻撃能力。しかしその発動には自身のシールドエネルギー、つまり自分のライフを削るといふ武器仕様であり、諸刃の剣でもある。その威力は全ISの中でもトップクラスだそうだが、俺のビームサーベルには効果が無かった。

その理由を一夏は織斑先生に質問した。

その回答が、

「ザラのインフィニットジャスティスは一時間に全世界のISのシールドエネルギーをフルに出来るほどの出力を生み出すエンジン、

『ハイパーデュートリオンエンジン』が搭載されている。更に兵装は100パーセントなら零落白夜が消滅させるどころか逆に鏢迫り合えば1秒でパンクするほどの容量だ。打ち合っただけでシールドエネルギーが空になる。正に零落白夜の天敵だ」

ソレを聞いた瞬間、一夏と箒は啞然とする。

ソレを見ながら織斑先生は溜息を吐いた。

「解つただろ？ コレだけリミッターを掛ける理由が……更にザラの技量と相まって倒せる奴がこの学園からいなくなる。アレだけリミッターを掛けても絶対防御がひび割れるほどの出力だぞ。100パーセントなら絶対防御がガラス細工だ」

それを聞いた瞬間、一夏と箒は俺のリミッターは甘いとすら考える顔を俺に向けた。

「と言う訳でザラ。ジャステイスのリミッターを更に掛ける。いいな？」

（お願いじゃなく命令ですよ。それ）

俺は心の中でしか突っ込む事が出来なかった。

その夜、1年1組が食堂を貸し切り、パーティーを開いていた。

「と、言う訳で代表は織斑　一夏君に決定しました！！」

その言葉に一夏は啞然とした。

「ちょちょヨット待て！！　何で俺！？　大体、代表決定戦はアスランの圧勝だっただろ！？」

何だ、その事か。

俺はニヤニヤしながら一夏にこう言った。

「ああ、それはな、織斑先生が俺が出たら圧勝してバランスが悪すぎるからここは間を取ってお前になった訳だ」

その言葉に一夏は慌てる。

「ならオルコットが！？」

その言葉にセシリアがこう言った。

「私は辞退させていただきますわ。何せ、私は敗れた身、アスランさんの指示に従いますわ」

そう言いながらセシリアは俺を見ながら何故か頬を赤らめる。

何でだろ？

「兎に角、一夏さん、頑張ってくださいまし。私とアスランさんの代わりに出るのです。恥はかせないで下さいね？」

その言葉に一夏は戸惑う。

「一夏さん」?

「ええ、友達をファーストネームで呼ぶのは当然ではなくて? それと私の事はセシリアと及びくださいな」

そう言いながら優雅に振舞うセシリアに篠ノ之が噛み付いた。

「一夏の名を慣れなれしく呼ぶな!!」

しかし、セシリアは涼しい顔で篠ノ之の耳元でヒソヒソ話す。

その内容に納得したのかそれ以上は何も言わなかった。

何を話したんだ。一体?

「まあ、友なら仕方ない。友なら」

「そうですね。おほほほほ」

そうしている内にカメラを持った二年のネクタイをした女子が突然声を掛けてきた。

「ハ〜イ新聞部の黛 薫子です。取材に来ました!」

新聞部? 何故?

「おお! 噂通り男子がいるね。しかも二人とも美形で結構結構」

俺と一夏を品定めするように取材を開始する女性。

「それじゃあ、代表になった織斑君から一言!!」

一夏はその強引さにシドロモドロになりながら答える。

「え、あ、その、頑張ります」

その内容に不服だったのか黛先輩は後で捏造する旨を一夏に告げる。

中々のイエロージャーナルである。

「それじゃ、1年最強の呼び声高く、IS学園の赤い騎士のあだ名を持つザラ君から」

そのゴテゴテした某二臭いあだ名は何だ？

俺の質問に黛先輩がこう答えた。

「今回の試合を見た生徒が映像を学内に配信してソレを見た生徒達がそう呼んだんだよ」

と。

兎に角、俺は取材に答える事にした。

「俺は一夏のサポートとして、一夏が勝利出来るよう全力で挑みたいと思います」

そう言つと、 黛先輩は詰まらなそうに模範的な回答でパンチがないと言われた。

そして最後にセシリアに振られたが話が長い事から適当に書いておくそうだ。

セシリアは黛に近付き耳元で語る。

「写真撮影は最初は私とアスランさんのツーショットでお願いいたしますわ。ソレと写真は現像して私に下さい」

「OK、OK。取材に協力してくれたしソレくらいお安い御用だよ」

セシリアはその返答を聞き、こっそりガッツポーズをとる。

（よし！！ ですね。アスランさんと私のツーショット写真が私の物に！！）

セシリアは浮かれてアスランの元まで歩み寄る。

「それじゃあ、ザラ君とオルコットさんから写真を撮るよ？」

アスランはそう言われ、仕方なくといった感じでレンズの前に立つ。

しかし、ここでアスランの予期せぬ行動をセシリアは取り出す。

行き成り、セシリアはアスランの腕に組み付き、その胸元をアスランの二の腕に押し当てた。

「セ、セシリア!？」

「あら、如何しましたの？ アスランさん？」

慌てるアスランを見ながらセシリアは瞳を潤ませながら頬を赤らめる。

その唇はリップが薄く塗られ、水をたたえた様な潤いを見せる。

アスランは二の腕の感触とセシリアの顔に不覚にもときめいた。

(不味い!! コレは凄く不味い!! 俺の二の腕にセシリアの柔らかいものが!!)

アスランは意を決してセシリアにお願いした。

「あのな、セシリア、その、当たっているんだが……少し離れてくれないか……?」

その懇願にセシリアは頬を更に赤らめ意地悪な微笑を湛えながら言う。

「あら、当たっているではありませんわ、当てていきますのよ?」

(駄目だ!! 何か知らんがセシリアが可笑しくなった!!)

アスランの内心の葛藤を他所に黛はシャッターを切る事を宣言した。

しかし、やはりここはIS学園、セシリアの思惑は物の見事に破算となる。

一夏と箒を含む全員がチャッカリフレーム内に入っている。

「な、何でこうなるのです!？」

セシリアの叫びを聞きながらアスランはほっとした。

しかし、アスランは知らない、これから彼の苦惱は加速していくのだから。

ソレもカナリ悪い方向に。

頑張れアスラン。

アスランの女性問題に幸あれ。

第6話 アスラン訓練を始める。

俺事アスラン・ザラがこの世界に来て早4ヶ月。

IS学園生徒としてこの学園に通っている。

今思えば、オーブ国防軍参謀本部の准将から一気に一学生である。

何と言うクラスチェンジだろうか。

その代わりに、重い責任と義務から解放された代わりに学生の義務と責任になったただけだ。

早い話が、学業だ。

俺はその学業であるISの実習の講義を受けている。

織斑先生は一組の生徒の前でISの基本操作の説明を開始した。

「では、これより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、ザラ、試しに飛んでみる」

その言葉に俺とセシリアは素早く答えた。

「解りましたわ！」

「ハッ！」

その瞬間、オルコットは瞳を閉じて念じる様にブルーティアーズを起動した。

「え、あれ？」

一夏は起動することが出来ず戸惑う。

「早くしろ、熟練したIS操縦者なら展開まで1秒と掛からないぞ」
織斑先生も容赦が無い。

そう思いながら一夏は何とかISを展開する事が出来た。

次は俺の番か。

俺は瞳を閉じる事無くノーアクションで起動した。

ジャステイスを形作る頭、胴体、手足、シールド、ビームライフルが0.1秒で形成された。

その瞬間、辺りがざわつく。

「アレが、ザラ君のIS」

「フルスキン？ でもあんなIS見たこと無いよ」

「でも、動画で見たときの色と違うね」

OS起動はスキップした。

コイツが核エンジンで動いている事がばれたら大事だ。

周りの喧騒を他所にVPS装甲を展開した。

メタリックグレーからローズピンクに近い赤に装甲が染め上げられる。

「色が変わった!?!」

「綺麗〜」

何故かセシリアが頬を赤らめながら俺を見つめる。

何でだ?

「よし、飛べ!!!」

その瞬間、俺はこう言いながら飛んだ。

「アスラン・ザラ、ジャステイス、出る」

俺は脚を少し折り曲げ、脚力を利用して飛翔した。

地上での発進の基本技術だ。

一タスラストを全開にして棒立ちで飛んではスラストが持たない。

俺は、上空500メートルの地点で静止した。

ソレを見ていたセシリアは啞然とした。

アスランは500メートル上昇、急速停止、全領域の索敵を僅か3秒でやってのけたのだ。

(す、凄すぎますわ……こんな事が出来るなんて……)

そう、アスランは実戦、しかも地上、宇宙問わず戦争をしてきた人間だ。

これはC・E・世界のMSパイロットでは誰でも出来る事、ナチュラル、コーディネーター関係なくである。

基本中の基本だ。

そうじゃないと自分が“戦死”してしまう。

だからこそ、ナチュラルの多い地球連合のMSパイロットはコレをミッチリと叩き込まれる。

反応速度や身体能力で及ばないナチュラルが戦うには反復して体に

覚えさせるしかない。

しかし、アスランの場合その基本動作が余りに速い。

そう、アスラン並の速度はキラヤシンの様な化け物クラスでないと先ずお目にかかれない。

余談はさておき、一夏は単に驚いているだけだ。

セシリアみたいにその異常さを理解していない。

ある意味で無知が成せる技なのかもしれないが。

そして、セシリアと一夏も同じ様に飛び上がったが、アスランと比べるとどうしても見劣りしてしまう。

一夏にいたっては最初は迷走して何とか飛び上がった程だ。

(コレは、自分の実力を上げて、尚且つアスランさんに近づくチャンスですわ!!)

そう思った瞬間、セシリアは燃えた。

ソレこそ、彼女のバーソナルカラーの青色の炎がメラメラと。

何か知らないがセシリアが燃えている。

何でだろ？

（大方、俺にライバル心を抱いたのか？）

そんな事考えているとセシリアが意を決した表情で俺の所まで飛んできた。

「アスランさん、お願いがありますの」

その言葉に俺はお願いの内容を質問した。

「お願いって何だ？ セシリア」

セシリアは大きく息を吸ってまた吐き出し、ソレを数回繰り返して俺に言った。

「私と一緒に放課後訓練していただきませんか？ 勿論、アスランさんのご都合に合わせていただきますわ」

どうでしょう？

上目遣いで瞳を潤ませながら懇願するセシリア。

（その顔に俺は弱いんだよ……）

過去にカガリにも同じ顔をされて、アクセサリーを買ってしまったり。

メイリンと一緒に食事をしようと頼まれた時もこの仕草に押されて

仕方なく外食をした。

更に言うなら秘書官の女性軍人と一緒に飲み会に参加してくれと頼まれた時もこんな仕草に押されて仕方なく参加した。

コレが引き金となつてカガリと喧嘩した。

考えたら鬱になった。

カガリ曰く『お前は女性に頼る甘い!!』と怒鳴られたのを思い出す。

いや、俺は其処まで甘くない。

無理なお願いは聞かないし、実現可能なラインなら聞くが。

やめよう、鬱になる。

俺は仕方なくソレを了承した。

その瞬間、セシリアは花が咲いた様な綺麗な笑顔を見せてくれた。

今のでクラツときたのは俺だけの秘密だ。

え、ヤッパリ、女に甘い上に尻軽だと？

俺は誠実だ！ ホントだぞ！！

誰に無く言い訳をしている自分が悲しい。

ソレを聞いた一夏も話に加わる。

「俺もその訓練に参加させてくれないか？ 確かに箒と訓練はしているがアイツイスについて何にも教えてくれなくて……頼む！ アスラン、この通り」

一夏は白式の左右のマニピレーターを合わせて合唱するようにお願ひした。

俺は一夏を安心させる様に言う。

「安心しろ、お前はクラス代表だしな、お前が嫌でも俺からするつもりだった」

ソレを聞いた瞬間、一夏が嬉しそうにお礼を言ってきた。

「サンキュなアスラン！」

コイツ、女が見たら惚れそうな笑顔を向けるな！

何、今度は女だけでなく男もかだと!？

俺はきわめてノーマルだ!!

そんなこんなで俺とセシリアと一夏と箒が訓練用アリーナにいた。

俺が織斑先生に許可を取って貸してもらった。

「と言う訳で、今回の訓練はそれぞれ個別で行う物とする。まずはセシリアの課題だ」

「ハイ！」

その言葉にセシリアは威勢良く答える。

「まずはセシリアは射撃技術の向上だ」

その言葉にセシリアが不満の声を上げた。

「基礎ですよ？ 私といたしましては……」

その言葉に俺はセシリアを怒鳴り上げる。

「馬鹿野郎！！ 基礎を疎かにするな！！ そもそもブルーティアーズは射撃メインの兵装が多いだろうが！！ セシリア今のお前は基礎を疎かにしている。キッチリ基礎を叩き込む！！ 課題は10秒間30発、移動する標的に全弾10ホールに確実に当てるのが課題クリアーとする」

その課題にセシリアは非難する。

「そんな無茶な！？」

「悪いが簡単な課題だ！！ レーザー兵器で反動も無いんだぞ！更に最終目標は10秒間に50当てるなんていわない。せめてソレが実戦で使える最低ラインだ！！」

その言葉に肩を落としながらセシリアは頷いた。

「解りましたわ……」

次に俺は一夏に向き直る。

「次に一夏、お前は白式を装備した状態で雪片式型を展開し素振り千本だ」

ソレを聞いた瞬間セシリア同様な顔をする一夏

「何でだよ!？」

「あのな、お前はハッキリ言って体力が無さ過ぎる。セシリアや篠ノ之よりも無い。断言できる。更にお前はISの事について何にも知らない。雪片式型の戦闘稼働時間は？ イグニッションブーストの機体消費エネルギー量とその持続時間は？ 零落白夜の戦闘稼働時間は？ これ等の情報から白式のシールドエネルギーの戦闘での割り振りは？」

次々に上がる俺の質問に一夏は口を閉じた。

「解つただろ？ お前はお前の持っている力すら把握できていないばかりか戦闘時猪突に突っ込む癖がある。先ずはお前がしなければならぬ事は体力作りと兵装の特性を理解する事、そして、エネルギー量をどうやって割り振っていくかが課題だ」

その言葉に一夏は質問した。

「何で、雪片式型を展開してなんだ？」

その質問に俺は答えた。

「雪片が何の犠牲無く展開している訳無いだろ？ シールドエネルギーを消費してるんだよ。だからこそ、雪片が電力を消費する前に千本素振りするしかない。だが、ISを動かすにもシールドエネルギーがいる。つまり、お前はマニュアルでシールドエネルギーを整しつつ、雪片の刃を維持した状態で白式のエネルギー効率を考え、素振り千本をやってもらう。無駄な動きをしたらそれだけ、機体にもエネルギーにも負担が掛かる。その為にある程度は体力や筋力を使う必要がある」

俺の解説を聞きながら一夏は黙って素振りを開始した。

俺は箒に向き直り今度は箒の訓練内容を伝える。

「篠ノ之、お前には座禅を一時間した後、自分の学んだ剣の方を一通りやってもらう」

その言葉に今度は箒が大声を出す。

「何故だ!？」

俺は篠ノ之を見据えながらこう言った。

「悪いが篠ノ之、お前の剣からは焦りや苛立ちしか感じられない。そんな感情で武器を振るえばいつかお前は仲間や友達を傷つける。ならば、少し立ち止まって、自分を見つめなおせ。今のお前の剣技はハッキリ言って脆過ぎる上に力任せすぎる。お前は力を持って何

がしたいんだ？」

その最後の問い掛けに篤は何も言えなくなった。

多分、唯力が欲しかったと言う単調な理由ではないのだろう。

俺の見立てでは多分、一夏がらみだと思う。

俺の予想では今の篠ノ之 篤を形成しているのは焦りや恐怖。そして、言わなかった何かに対する怯えだろうか。

そう思いながら俺は三人を見ながら思う。

前途は多難だと。

第7話 アスラン竜の様な猫と出会う

俺が教室に入ると一夏と数人の女子が話していた。

一夏が俺に声を掛ける。

「お〜い、アスラン！」

その呼びかけに俺は鞆を机の上に置きながら返事をした。

「何だ？」

「聞いたか？ 転校生の話？」

転校生？ 何とも季節外れの転校生もいたものだ。

一夏と話していた女子も俺に語りかける。

「そうそう、たしか、その子が2組の代表だって」

「そうか、2組は転校生を代表にしたのか」

俺はそう考えながら多分2組の代表はセシリアみたいな国家代表候補生だろう事を予測した。

何せ、この時期の転入は試験内容が入学以上に難しかったと記憶している。

つまりソレをパスするだけの知識と技術があると言っ事だ。

「まあ、ウチには専用機持ちが3人いるからそんな心配は無いでしょ？」

「そうだね〜おりむ〜もセツシ〜もいるし、いざとなれば学年最強のアスにゃんもいるしね〜」

本音の言葉に一夏と他の女子も頷いた。

「その情報、もう、古いよ!!!」

何とも元気な声が1組の教室の喧騒を遮断した。

全員が黒板側の出入り口を見る。

「残念だけど2組は専用機持ちなの。そう簡単に優勝させてあげないわよ!!!」

何とも気合の入った御嬢さんが現れた。

髪は栗色のツインテール。

背は小柄だが中々重心が安定している。

「あ、鈴?」

「そ、中国代表候補生、鳳鈴音。今日はあんた達、1組に宣戦布告しに来たって訳」

その言葉と共に教室はざわつく。

「どうやら一夏の知り合いらしい。」

一夏はそれにわき目をくれず少女に語りかける。

「お前ソレ、似合わないぞ」

その言葉に少女は激昂する。

何ともシニールなやり取りだ。

「な、何よ！？ 折角格好よく登場したのにぶち壊しじゃない！！」

彼女のカッコよさの基準が解らんが、後ろにはご注意くださいな。

少女は頭を叩かれ、上半身だけ前のめりになる。

「イッタ、誰よ！？」

そう言い後ろを振り返ると織斑先生が立っていた。

「いい加減教室に戻れ。邪魔だ」

中々きついな織斑先生。

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。速く行け、馬鹿者」

そう言われ少女、もうめんどくさいので鳳はすくすくと逃げていった。

まるで猫が首根っこ掴まれて追い出される感じだ。

時間は流れ、学園食堂。

多くの生徒が昼食を取る為にぎわっていた。

俺、セシリア、箒、一夏、鈴はここで食事を取る為に集まった訳だが。

「しかし、驚いたぞ。鈴がIS学園に転入してきたなんて、しかも中国の代表候補生として」

その言葉に鳳も驚いた様に一夏に言う。

「コッチだつてニューズみて驚いたわよ。行き成り、試験会場でIS動かして騒ぎになったんだつて？」

その言葉に一夏は苦笑しながら箸を止め思い出すようにその時の様子を鈴に語る。

「あの時は私立の試験会場で試験が行われていたんだ。その時、迷っちゃまって……係の人に聞いても解らないって言うから廊下をウロ

ウロしてたらISを見つけてな」

その時の事を一夏は思い出したらしく遠い目をして語った。

「ふうん」

鳳が気の無い返事を返した時だった。

篠ノ之が二人の所まで歩み寄り勢い良く両手で机を叩いた。

ドンと言う音と共に篠ノ之は烈火の如く一夏に詰め寄る。

「一夏！ ソイツは誰だ！！」

その質問に一夏はたじろぎながらも答える。

「え、あ、ああ、鳳 鈴音、箒が転校して入れ違いで転校してきたんだ。鈴とは中二の頃まで一緒だったぞ」

どうやら鳳も篠ノ之が誰か解らないらしく一夏に質問する。

「コイツ誰？」

一夏は篠ノ之を紹介する。

「ああ、俺のファースト幼馴染の篠ノ之 箒」

「よろしく、一夏の幼馴染の篠ノ之 箒だ」

「此方こそ、一夏の幼馴染の鳳 鈴音よ」

何か知らんがさつきから“一夏の幼馴染”と言つフレーズを強調する二人。

目から火花を放ちあっていた。

偉く苛烈な何かが2人の中で行われている。

何時までも戦闘膠着をさせて置くわけには行かず俺とセシリアはヒソヒソと話し合った。

「セシリア、あの二人会つて早々苛烈な何かを繰り広げたぞ？」

「ほおつて置いて宜しいのでは？ 女の戦いに首を突っ込むのはマナー違反ですし……それに一夏さんが何とか……」

「無理だろ。一夏の奴、事態が飲み込めなくて困惑してるぞ？」

俺は一夏に目を向けながらそう言う。

事実、一夏は篠ノ之と鳳の間に挟まれ如何すればいいか解らないと言う顔をしていた。

「ではどの様に？」

俺は溜息を吐いてセシリアに言う。

「すまない、先に食べていてくれ。友を見捨てられない」

セシリアは俺の言葉に溜息を吐いて答える。

「私も行きますわ……流石にあの状況はよろしくありませんもの……」

「有難う。セシリア」

俺の言葉にセシリアは頬を赤らめながらも頼もしくこう言ってくれた。

「アスランさんの為なら戦場にだって飛び込みますわ」

其処までしなくてもいいのだが……

まあ、今は一夏を救出する事が先決だ。

俺とセシリアは一夏に話しかける様に誘導する事にした。

「一夏、今日の課題は白式を装備した状態での回避訓練を行う予定だ放課後空いているか？」

俺の問い掛けに一夏は助かったと言わんばかりに頷きながら言う。

「ああ、空いてるぜ。素振りはいいいのか？」

俺はその問い掛けにこう答えた。

「素振りをやってからエネルギーを回復して行く」

その言葉にヤッパリがっかりして肩を落とした。

その様子をセシリアは微笑みながら一夏言う。

「基礎は大切ですよ？ 土台がしっかりしてないといい家は建てられませんわ」

セシリアは自分も基礎は好きでは無いが、俺の射撃訓練でその基礎の重要性を改めて認識した。

自分がいかに雑な射撃をしていたかが目に見えてわかる。

時間内に正確に的を射抜く事の重要性和不規則に動くターゲットを捉える難しさは骨身に染みていた。

だからこそ、俺の教えは自身の傲慢さを正すいい機会になったと彼女は話してくれた。

「そう言うことだ。セシリア。お前には自分も動きながら射撃してもらおう」

その言葉にセシリアは嬉しそうに答える。

「やっと応用編ですね？」

「まあ、基礎には変わりないがな。篠ノ之、お前は今の訓練と平行して剣技の方の速度を上げる訓練だ」

「解った」

その言葉に毒気を抜かれたらしく篠ノ之は素直に従った。

そんな時だった。

鳳が俺とセシリアを見ながら一夏に質問した。

「一夏、こいつ等、誰よ？」

何とも礼儀を知らない問い掛けに一夏は答える。

「ああ、同じクラスでダチのアスランとセシリア」

「よろしく」

「よろしくですわ」

俺達には興味無いのか鳳は気の無い返事を返す。

「ふん、よろしく」

そんな言葉を投げかけながら一夏に提案する鳳。

「私がISの操縦、教えてあげようか？ 私の方が旨く教えられる
と思うんだけどな」

その言葉に筈はもとよりセシリアも切れた。

「不要だ！ ザラは1組で同じクラスだ。しかもそれだけじゃない」

「アスランさんは学年最強の称号を持つお方ですよ！！ 更に2、
3年生にも互角に戦える相手はいないと思いますわ。何せ、『IS
学園の赤い騎士』『獅子の名を持つ赤い騎士王』『IS学園の赤い
彗星』ですもの」

何か知らない間に変な異名が増えてる!?

その言葉に鳳が俺をマジマジと見つめながら言う。

「コイツが!? 動画サイトで変な赤いISが戦う所は話題になっただけ。アンタだったの!? 『IS学園の赤い騎士』は!?!」

そんなに有名なのか?

知らなかった。

(と言うより機密もへったくれも無いな……動画サイトで俺の戦闘が撮影されるとは……織斑先生め……ジャスティスの秘密が明るみに出たら如何する気だ?)

俺はそんな事考えながら如何したものかと思った。

「私も訓練に加わるわ!!!」

その言葉に俺は拒否した。

「鳳、一応、クラス対抗戦が終わるまで待つてくれないか。お前は2組だし、敵の手の内を晒すのは懸命ではないそちらも手の内を知られて戦うより驚かせた方がインパクトはあると思うが?」

その言葉に鳳は考え込む。

「解ったわ。でも、アンタには負けないから!!!」

その言葉に、俺は答える。

「悪いが戦うのは俺じゃない」

その言葉に鳳は目を丸くして驚いた。

「何ですって！？ アンタが出ないで一体誰が！？」

「一夏だ」

俺の回答に鳳は一夏を見ながら言う。

「なら勝ったも同然ね」

その言葉に一夏がムツスとしながら言う。

「悪りいけど負けるつもりは更々無いからな」

お互いにらみ合い鳳は食堂を後にした。

第8話 アスラン部屋に招待する

俺達は何時もの如く放課後、訓練アリーナを借りて訓練を行っていた。

セシリアは高速動き回りながら高速で動局的を狙い撃つ。

最初は10ホールを確実に当てていくがやはり動きと射撃の荒さは目立つ。

「セシリア、射撃を意識しすぎだ！ もう少しISの機動にも気を使え」

「わ、解ってますわ！！」

セシリアは一杯一杯なのか段々と10ホールから外れていく。

「クッ！？」

セシリアは歯噛みする様に舌打ちして射撃を続行した。

一方、一夏はランダムに動き回り攻撃するシーカーに苦戦していた。

「クソ！！」

「一夏！ センサーと自分の目と両方で確認しながら動け。落とさ

れるぞー!!」

「解ってるってー!!」

そう言いながらもカス当たりする一夏。

次は箒だ。

「箒！ 剣の方が雑だ！ 方を知らない俺でも雑だと言う事が解るぞー!!」

「解ってるー!!」

箒も余裕無く答える。

量産機の箒は兎も角、一夏やセシリアの機体は高スペックなだけに機体に振り回されている。

その意味でこの慣らしの効果も狙っている訳だ。

まあ、前に比べて格段の進歩だ。

成る程、嬉しいもの生徒がスクスク育つと言うのは。

訓練が終わったその足で俺はセシリアに俺の部屋まで来てくれと伝えた。

セシリアは何故か顔を真っ赤にして喜び勇んで行くと言う返答を貰った。

俺の部屋に行く事がそんなに嬉しいのか？

果てしなく謎だ。

私、セシリア・オルコットは有頂天だった。

その理由はアスランさんが私を部屋に呼んだのだ。

その瞬間、気合が入った。

(よし！！ ですわ！！ よし！！ ですわ！！ アスランさんが
自室に招いてくれた！！ コレは“フラグ”と言う物ですわ！！)

そう思った私は身を清める為にシャワーを浴びて下着をチョイス。

(可愛らしい下着もいいですが大人の雰囲気のある下着もいいです
わね……)

ア~~~~~もう！！ 迷いますわ
！！

服も気合を入れませんと！！

私はアスランさんの部屋へ私服に着替えて尋ねた。

胸が高鳴る。

私は意を決して部屋のドアをノックした。

木と指がぶつかる音を聞きながら私はアスランさんを待った。

「はい、今行く」

その言葉と共に益々胸の鼓動が高鳴る。

ドアが開かれた瞬間、アスランさんの私服姿を私はみた。

白いワイシャツに青いジーンズ姿。

胸元のボタンをはだけさせ美しい肌が見える。

(こ、これは……エロいですわ~~~~~!!!!!!)

私は心で絶叫しながら鼻血をながした。

しかし、外の顔の私は済まして見せる。

ここでアスランさんに無様は見せられませんわ!

乙女の気合を舐めないで頂きます?

え、何ですか?

セシリアはエロいな~~~~~ですつて!!

私は健全ですわ!!

と、誰かのボケに対してツコミしたのが何故かむなしいですわ。

アスランさんに案内され入った部屋は何てこと無いIS学園の寮と同じ広さのワンルームでした。

其処にはベットと机とテーブルが置いてある。

アスランは備え付けの台所に行き、紅茶を私に入れてくれました。

いい香りですわね。

この香り、蘭の花の香りに近い香りと言う事はプリンス・オブ・ウエールズですわね。

ダージリン、ウバと並ぶ三大茶葉の一角、キーマン茶のブレンドですわ。

お茶の選択も悪くはありませんわ。

1日を締めくくるイブニングティーには最高ですもの。

アスランさんは紅茶が好きなのですわね。

「どござ」

そう言いながらアスランさんは私の前にカップを置いてくれた。

アスランさんはポットを持ちながらソレをテーブルに置き、こう言った。

「ウエールズは嫌いかな？」

その問い掛けに私は嬉しくなりました。

そして私は今自分が出来る最高の笑顔で答えます。

「大丈夫ですわ」

と。

私は福与かな香りを楽しみながらカップに口をつける。

「美味しい……」

自然とその様な声が出てきてしまった。

アスランさんは微笑みながら紅茶を飲み納得したようにこう言った。

「悪くは無いな。クッキーもある。食べるか？」

「頂きますわ」

クッキーを食べながら他愛無い話をする私達。

（あ〜……まるで恋人みたいですね……）

そんな時だった、アスランさんが私を自室に呼んだ理由を説明した。

「君には俺とチェスと将棋と囲碁を同時にしてもらおう」

その言葉に私は固まりました。

「いいか、一夏。今回はのっけから鳳とだが自信は？」

その俺の挑発に一夏はにやりとして答えた。

「大丈夫。何とかするぜ」

気合は十分。

準備もしてきた。

体調も万全。

膏が載っている証拠だ。

俺は納得して頷きながら鳳の機体説明を行う。

「鳳の機体は中国の専用IS甲龍、第三世代型ISでパワーから繰り出される接近戦と中距離での射撃が出来る近中距離戦型のISだ。兵装は連結青竜刀型兵装、双天牙月に空気圧作用兵装、龍砲だ。コイツは目に見えない空気の砲弾を撃ち込むタイプだな。しかも砲身も見えないから回避はハイパーセンサーを多用しろ」

「解った」

俺の言葉に頷く一夏。

「よし、行つていい」

「一夏、頑張れ!!」

「一夏さん、ご武運を」

俺、箒、セシリアの激励に背を向けて右手を上げながら答える一夏。

そして、カタパルトにロックされる一夏の白式。

「織斑 一夏、白式！ 出るぜ！！」

そう宣言して一夏は空に舞い上がった。

俺こと織斑 一夏はアスランに習って自分の名前と機体名を言って飛び出していた。

何故こんな事しているかといえばカツコよかったからに他ならない。

アスランは俺にとって兄貴でもあり師匠みたいなものだった。

何をするにも一タカツコよくてどんな奴等より頭が頗るいい。

更に凄い技術と力と経験を持っていた。

だが、俺が最も心を引かれたのはアスランの心の強さと優しさ。

それに尽きた。

今の俺ではどう足掻いてもアスランにはかなわない。

あの強さも優しさも何もかも。

俺は……多分、超えたいんだと思う。

師匠であり兄であるアスランを。

その為にも俺はこの戦いに勝ちたい。

鈴に勝ちたい。

そう思った。

勝てば答えが得られるかも知れないアスランを超える方法が。

俺はモニターを見ながら腕組みをしている。

開始を告げる宣言から数十秒が経過した。

「いい試合運びですわね」

セシリアの言葉に俺も頷く。

「ああ、一夏の兵装は雪片式型一本のみ。つまりソレしか攻撃オプションが無い。なら、接近して相手を切りつける有効なポジション作りから始まる。いいペースだと言いたい所だが鳳もそれを知って

いる。だからこそ無闇な接近戦を避けて龍砲の攻撃で間合いを取っている。このままでは一夏はジリ貧だ。シールドでエネルギーを持っていかれ、回避でエネルギーも持っていかれる」

その言葉に筈が噛み付く。

「何を言う。一夏にはイグニッションブーストがあるではないか！？」

その言葉に俺はこう反論した。

「そもそもイグニッションブーストは強襲、奇襲用の技術だ。しかも単一方向のみだ。一度失敗すれば次からは相手も知る。避け方を考える。相手はマネキンでは無い。生きて考える人間だ。つまりは一回きりの一夏の切り札だ。ソレをおいそれと使えない。一夏もソレを理解しているから出さない」

そう、勝負の鉄則とは相手が嫌がる事をする事にある。

いかに相手の裏をかけるか、いかに相手の思考の外から戦えるか、いかに相手を困らせるか、いかに相手の情報を入手出来るかが勝敗の鍵となる。

しかし、どんなに準備をしても負ける時は負ける。

なら、相手を出し抜くには如何するか？

自分が持っている技術と相手の情報を上手く整理し戦うしかない。

「奇襲の鉄則は相手の予期しない方向から攻撃することにある。方

法は幾らでもある。考えるよ一夏……」

俺は内心焦っていた。

鈴の奴……俺に接近させない為に龍砲を乱射しやがる。

「如何したの一夏？ まさかこの程度とでも言うの？」

ソレで勝てると思ったの？

そんな小馬鹿にした鈴の罵倒が響く。

舐めやがって……

しかし、反撃のチャンスが無いのもまた事実。

クソ、そうしたら……

そうだ！！

アレ、やってみるか……

アスランがやっていた技。

でも初手っばちで出来るのか？

ああ、もう！！

グダグダ考えるのは止めだ止め！

俺らしくやるぜ！

俺はイグニッションブーストで正面から鈴の前に加速する。

「ハン！ 馬鹿の一つ覚えみたいに！！」

そう鈴は叫びながら簡単に回避した。

今だ！！

俺はPICを俺の周辺に展開する。

まるで無重力空間にいる感覚になった。

そして俺はその状態から足を蹴り上げ、体を捻った。

その瞬間、急速に体は鈴の方に向く。

そして、イグニッションブーストを展開した。

俺は一夏の行動に驚いた。そう、ソレは良く見慣れたもの。

C・E・世界では当たり前前の技術。

「アン……バック……だと……そんな技術俺は教えていないぞ!？」

セシリアが疑問に思ったらしく俺の言葉に質問した。

「あの、アンバックとは……一体……?」

セシリアの質問に俺は説明する事にした。

「AMBAC、Active Mass Balance Auto Controlの略で日本語略は能動的質量移動による自動姿勢制御……そもそもアンバックは宇宙空間の様な無重力空間で可動肢の一部分を高速で動かすことで発生する反作用を機体全体の姿勢制御に使う技だ」

「でも、今は1Gつまり重力がありますわ。どうやって……」

「PICを機体周辺に展開して一時的に無重力空間を形成したのだから。通常のISの飛行は旋回して回るか機体に急ブレーキを掛けて反転するぐらいだ。しかも、アンバックには美味しい得点がある」

「それは……?」

「エネルギー消費が少ない事だ。旋回するにしても急ブレーキを掛けるにしても違う方向にブレーキを掛ける。つまりそれだけエネルギーを食う訳だが、アンバックはほんの少し機体周辺に僅か0.1秒PICを展開するだけだ。エネルギーのロスを少なく出来き

更に即座に方向転換できる」

「それならPICをマニュアル操作に切り替えなければ出来ませんわー！！　つまりは同時に機体制御を意識する必要がありますのよ！　それを一夏さんが出来るなんて！？」

その言葉に箒は誇らしそうに語る。

「当然だ！！　一夏は昔から一度教わった事は少し反復すれば出来るようになる！！」

俺は首を横に振って否定した。

「いや、俺は教えていない。確かにセシリアとの戦いと一夏との戦いで披露したがそれだけだ。一夏には高等すぎると教えていなかった」

その言葉に流石の箒も驚きの声を上げた。

「嘘である……ISに乗って数ヶ月の人間に出来ることか！？」

何であれ一夏の学習能力は驚異的だ。

コーディネーターと対等くらいに。

よし、成功！！

鈴も驚いてやがる。

「な！？ もう反転してる！！」

慌てて鈴は双天牙月を構えるがもう遅い。

「もらった！！」

「チイ！！」

その時だった。

突如、アリーナを覆っていたシールドが砕け散った。

突如として俺も鈴も動きを止めた。

「何だ！？」

「何！？」

奇しくも俺と鈴は同じ様な言葉を発した。

第9話 アスラン敵を撃破する

何だ、アレは。

俺はそう考えながら体は動いていた。

「セシリア、篠ノ之、俺は教師専用管制室まで行く」

俺の言葉にセシリアも篠ノ之も着いて行くといった。

俺は仕方なくソレを了承し走り出した。

俺が教師用管制室の自動ドアを開けると其処にはオペレーターの先生が生徒に避難指示と避難経路の案内を行っていた。

俺は状況を確認すべく織斑先生に語りかける。

「状況は？」

その言葉に織斑先生は明確に答える。

「1分前、何者かが外部遮断シールドを破壊。その穴から1機のISが進入した」

敵勢力IS一機のみか。

「生徒の避難は？」

「現時点では70パーセント。残り30パーセントが誘導中だ」

「救出部隊の編成は？」

「現在、IS教官部隊を編成中だ」

「編成時間は？」

「後、10分」

遅すぎる。

「スクランブルが掛かってまだ飛び立たないとは、とんだ話だ」

俺が吐き捨てるように言うと山田先生が非難する。

「こんな事1度も無かったんですよ？ それを即時対応などと」

俺はその山田先生の言葉にこう返した。

「非常事態は何時起こるか解らないから非常事態と言つのです。山田先生、IS学園は安全と言つ概念は捨ててください。何せ、ここにはISと言つ“兵器”がある。襲撃者もソレを理解している。被害があつてからでは遅すぎます」

「お前はそんな説教を垂れる為に態々来たのか？ 違つたる？」

織斑先生の言葉に用件を述べる。

「救出命令を、俺に下さい。最悪、敵は“撃破”します」

その言葉に千冬は俺を睨み付けた。

「学園で人死にはご免だと言ったはずだが？ ソレにお前は生徒だ。出すわけにもいかん」

俺は織斑先生を怒鳴っていた。

「今は非常事態だ！！ ここで生徒が死ぬかも知れない状況を放置している場合ですか！？ 今、即時に動かせる兵力は俺とセシリアだけだ！！ なら貴女はこれ以上の被害を出さずにこの混乱を収拾する義務と責任がある！！」

俺は尚も怒鳴る。

「力と権利を持つものはその責任を果たせ！！ 義務を果たせ！！ 下らない論理はこの際切り捨てろ！！ 少しの判断の遅れが取り返しのつかない結果を招く！！ なら今は、行動の時だ！！ ここで決断しなければ、もっと多くの人が傷つくんだぞ！！」

その俺の怒声に織斑先生は溜息を吐いた。

「ザラ、教師にそれだけデカイ口を叩いたんだ。死人ゼロで納める自信があるのだろうか？」

「少なくとも学園側の人的被害をゼロに出来る自信があります」

織斑先生が溜息を吐いて命令した。

「解った。緊急出入り口は開けておく。リミッター解除は時間が間に合わん。許せ。その代わり、織斑と鳳は助ける。他の生徒は此方が面倒を見る。いいな？」

俺は背筋を伸ばし敬礼した。

「了解！」

「私も行きますわ！！！」

セシリアはそう言いながら俺の後に続く。

「いいのか？」

俺の質問にセシリアは答えた。

「援護射撃くらい出来ますわ」

「解った。セシリアは俺の援護射撃と敵の牽制を頼む」

「了解ですわ」

その言葉に篠ノ之も続くが流石にISを持っていない彼女を生身で戦場に放り出すわけにも行かない。

「篠ノ之は生徒の避難誘導を頼む」

「何故！？」

その言葉に俺は怒鳴る様に言う。

「戦場に出る事だけが戦いではない。自分の出来ることをしろ！！
いいか、戦いだけが全てを決めるのではない。俺達の勝利は人的
被害ゼロだ。その実現の為に迅速に生徒を非難させる必要がある。
それも立派な戦いだし、勝利にも貢献している！！ だから、お前
も今出来る戦いをしろ！！」

「……………解った……………」

篠ノ之は悔しそうにそう呟いた。

「よし！！ セシリア！！ セシリアはISを即時展開した後敵勢
力に牽制射撃だ。一夏と鳳の撤退時間を稼げ」

「了解ですわ！！」

俺とセシリアは全力疾走で駆け出した。

一夏と鈴はどうにか動き回りながら敵と戦っていた。

「コイツ！！ 硬すぎるわよ！！ どうなってるのよ！？ コイツ
のシールドは！？」

鈴の悲鳴に近い絶叫に一夏も同意した。

「クソ！！ 硬え！！ 何だよ！？ 雪片が通らねえぞ！？」

敵のISは指からビームらしき物を撃ち込む。

何とか回避する一夏と鈴。

「どうすんの一夏！？ 私たちにはパワーが……」

鈴の言葉に一夏も頷くしかない。

事実上、零落白夜は撃てて後一回。

イグニッションブーストは使えない。

(こっぴなったら……)

一夏は覚悟を決めて鈴を見据えた。

「鈴、すまないが、困になってくれ。相手の注意が逸れた隙に零落
白夜を叩き込む」

その一夏の言葉に鈴も頷く。

「それしか打開策がないわね……解った、出来るだけやってみる」

その言葉に一夏は嬉しそうに礼を言った。

「サンキュな鈴！」

鈴は一夏の笑顔に当てられ頬を染める。

「顔赤いぞ鈴？」

「五月蠅いわよ馬鹿！ ミスったら承知しないんだからね！！」

「ミスるかよ馬鹿！！」

そう言いながら一夏は飛び立つ。

「馬鹿とは何よ！！！」

そう叫びながら鈴も衝撃砲を乱射する。

案の定、敵は鈴の方に釘付けになる。

一夏はやはりと思った。

(コイツ、攻撃される対象にしか反応しない。脅威の優先順位が攻撃する奴が一番、二番目が動く対象か、ロボットだぜそれじゃあ)

そう、一夏は敵ISがAIではないかと思っていたが案の定だった。

その裏づけも鈴の攻撃で取れた。

(後は、零落白夜を叩き込む)

一夏は通常の加速で敵ISに迫り零落白夜を叩き込むが、敵がそれに反応し一夏のどてっ腹にその拳を叩き込んだ。

吹き飛ばされてアリーナ外壁に叩き付けられる一夏。

「一夏!？」

鈴の悲鳴が聞こえる。

しかし、一夏は笑っていた。

「おせーぞ二人とも」

その言葉と共に敵ISを囲む様に“五方向”から青いレーザーが放たれる。

敵は不意打ちだったのか絶対防御が発動し、その悉くが弾かれる。

「あら、コレでも早く来ましてよ？」

優雅にライフルを構えながらセシリアは違う位置に移動しながらブルーティアーズを操作しライフルを構える。

「特訓の成果見せてあげますわ!!」

そう宣言するとセシリアは不規則にブルーティアーズを操作する。

自分も移動しながら精密射撃を行った。

セシリアの不規則なビットの連続攻撃と本体のライフルによる攻撃で敵は翻弄される。

そう、まるで一夏と鈴から引き離されるように。

次の瞬間、一夏の前に一陣の赤い風が吹き抜ける。

其処にはジャスティス、アスランが立っていた。

「アスラン！！」

一夏はホットした様にその名を呼んだ。

「良く耐えたな。一夏と鳳は下がれ。後は俺がやる」

そう言うとアスランはビームライフを射撃しながら飛び出した。

一夏もセシリアも俺が教えた以上の事を見せてくれた。

なら、先生の俺が落第点は取れんだろ。

そう思いながらジャスティスを動かすが遅い。

（クソ！！ リミッターの影響が遅すぎる！！）

射撃はシールド破壊は出来たが絶対防御は無傷だった。

しかも、俺のモニターにはエネルギー消費量が表示されていた。

そう、ハイパーデュートリオンの核エンジンジェネレーターをカットしてデュートリオンジェネレーターのための機体仕様だ。当然、シールドエネルギーも無限ではない。

なにせ、ハイパーデュートリオンとは核エンジンとデュートリオン、2つのジェネレーターが相互補完しているので理論上パワーダウンは有り得ないハイブリットエンジンだ。

その内どれか一つがカットされればジャステイスの兵装供給電力を維持できない。

それだけジャステイスの兵装のエネルギー消費量はずば抜けて悪い。核ジェネレーターだけなら旧ジャステイス並に出力が落ちてしまいうし、デュートリオンだけならすぐガス欠だ。

だからシンも撤退せざるを得なかった。

その為、兵装消費電力を落とし、VPS装甲消費電力も調整された。

お陰で他のISみたいに燃費が悪い。

一応、ジャステイスにも絶対防御があるみたいだが、VPS装甲と相まってかなり消費量が激しくなる。

それでもフル充電のシールドエネルギーは1200と他のISを大きく引き離す。

俺は接近戦を仕掛ける。

ビームライフルとハイパーフォルティスビーム砲を撃ちながら牽制する。

ビームライフルは簡単に絶対防御に阻まれたが、ハイパーフォルティスは絶対防御を破壊した。

だが、相手には届かない破壊するだけだ。

(ならば、接近戦で叩く!!)

俺はそう思いながらビームサーベルを両方抜刀し、敵前に躍り出る。

敵のエネルギー砲をかわしながら両腕部を切断する。

そして、左手のビームサーベルの出力を最大にして相手の右わき腹に叩き込む。

その瞬間、絶対防御がひび割れていく。

(クソ!! 最大出力だとシールドエネルギーの消費が早い!!)

しかし、敵も俺を引き剥がす為に残った足で攻撃する。

「甘い!!」

俺は一旦離れ、相手の蹴りに合わせる様に右のグリフォンビームブレードを展開して相手の足を切断した。

敵の右足が火花を散らしながら吹き飛ばす。

そして、体勢が崩れる。

俺はそんな決定的隙を逃さない。

右手のビームサーベルを最大出力にして突き入れる。

暫く絶対防御が拮抗した後、絶対防御を貫通し相手に突き刺さる。

まるで機械に突き入れた感触。

どうやら人間ではないらしい。

俺が桃色の刃を引き抜くと敵は力なく崩れ去る。

こうして、俺達の戦いは終わりを告げた。

第10話 アスランハロハロ協奏曲

俺は今回の事件の詳細を確認する為に織斑先生の所に来ていた。

俺はあくまで二人だけで話がしたいと呼びつけたのだ。

「先生、率直にお尋ねいたします。あのISは無人機ですね？」

これは皆知る所の確認である。

「そうだ」

その肯定に俺は次の質問をした。

「あの無人IS、そのコアは回収している筈です。なら、ISにコアナンバーはありましたか？」

これは確証ではなく俺の考えだ。

この世界に無人ISを開発した国家、組織、企業は存在しない。なら、答えは自ずと明らかになる。

俺の質問に織斑先生はあくまでも極秘事項で押し切る。

俺はその答えに自身の考えが正しい事を確認できた。

織斑先生は基本的には嘘はつかない。極秘事項で学生においそれと教えられないのは重々承知。

「解りました。これ以上は問いません。最後に質問して宜しいですか？」

これこそ俺が確認したかった事だ。

「今回の襲撃を計画、実行したのは篠ノ之 東博士ですね？」

その言葉に、ほんの僅か、常人では気付かない位に織斑先生の眉根は動いた。

「お前の事だ。そう思う根拠があるのだろうか？」

言ってみろ。

その目線が俺にそう告げていた。

俺は、何故その考えに至ったのかを説明した。

「まず、あの無人IS、あのISは無人で動いていた。つまり、遠隔操作或いは自立制御AIが搭載されている可能性がある。今の所ISを無人で動かせる国家、組織、企業は存在しない。もし、無人で動かせたなら国防に置いて大きな一歩となる大々的に喧伝される筈だ。なのに何処もそんな情報は無かった。ハッキングまでして洗出しをしました。間違いないでしょう。つまり、あれは個人、或いは小規模の組織が運用した事になる。しかし、個人や小規模組織でISを運用するなど不可能だ。襲撃にしても可笑しい。先ず襲撃の基本は相手の戦力をそぎ落として陽動とかく乱を行い本命を叩く

のが鉄則で更に退路の確保も必要だ。しかし、ソレすらない。現に I S 学園の警備や緊急即時対応は策で俺が襲撃者なら教師、生徒の I S 保管庫や整備室、更に職員室や待機室、教室を襲撃してかく乱と陽動と敵戦力低下を行つてから襲撃を行う。しかし、敵は真つ先に一夏達に所に襲撃をした。もしソレが陽動やかく乱なら狙われるのは I S 保管庫だがそんな形跡は一切無い。つまり、目的は一夏達だ。だが、鳳や一夏の経歴を調べても後ろ暗い所は余り無かった。つまり、襲撃される可能性があるとするなら一夏達の I S の奪取。しかし、敵は I S を奪取する所か破壊するような素振りさえ見せなかった。ソレにしては急所や致命傷を避けた攻撃が目立つ。威力偵察にしては派手すぎる。俺が敵なら破壊工作を学園内で行い。試合を中止させ、一夏と鳳を分断、然るべき後に各個撃破し I S を奪取する作戦の方が被害は少ない。更に言うなら一人でいる所をコツソリ暗殺する方が早い。こんな素人でも思いつく事すらしなかった。なら目的は一夏達の威力偵察だが兵数の少なさや撤退経路が無い。たとえ使い捨ての駒でも自分達の形跡を残すような襲撃は避けるべきだ。なのに敵は証拠物件をあんなに残してくれた。つまり、コレはメッセージだ。ナンバーの無いコア、そして、何処にも無い無人機、詰まる所コレは篠ノ之 束のメッセージ。では、一体誰に宛てたメッセージなのか、貴女ですね？ 織斑先生」

俺の説明に織斑先生はこう質問した。

「お前の仮説が正しくて、なら束は何が目的で私にメッセージを残した？」

「白式を開発したのは篠ノ之博士だと私は考えます。そして、一夏や篠ノ之の話を聞く限り彼女は自分の研究成果と自身の作った物、自分が興味のある物、そして、自分が認めたい握りの人間だけしか興味の無い人間だ。なら、コレは一夏と白式の戦闘テストだ。そし

て、その犯人が博士である事を貴女だけに教えた。つまり、これが一夏と白式をテストする為に次も同じ様な、或いはステップアップした事を行うと言うメッセージだと俺は考えます。まあ、コレはあくまで俺の仮説ですが」

最後に俺はそう付け加えながら織斑先生に背を向けた。

その背に織斑先生は語りかける。

「ではお前の仮説が正しく、襲撃がまたあつた時は如何する？」

俺はその問い掛けに振り向きながらこう言った。

「全力で叩き潰します。悪いが、この世界は彼女の遊び場でも実験場でも無い。まして、一夏は実験動物ではない。人だ。更に、自分の為に他人を踏み躪り何とも思わない様な奴は俺の敵です。倒します」

俺はそう言いながら去った。

1時間目が終わり、俺はセシリアの所に行く。

「如何しましたの？ アスランさん。珍しいですわね」

俺はセシリアにある提案をした。

「目を瞑って手を出してくれるか？」

その言葉に、セシリアだけでなく一夏や箒を含む全生徒と織斑先生も俺に注目した。

「わ、解りましたわ」

セシリアは戸惑いながらも右掌を上にして俺に差し出した。

俺は彼女の手にある物を載せた。

「ハロ、マスターに挨拶」

『ハロ、ハロ！ セシリア！ ゲンキカ！！』

一瞬、セシリアは戸惑いながらも掌の丸い物体を繁々と見つめた。

「か、かわいいですわ……これは何んですのアスラン？」

「ああ、ハロだ。ソイツはISの操作系調整プログラムの補助なにかもかねたタイプだ。整備に役立ててくれ。後、書類整理も自分からパソコンに接続して音声入力で書き込む事が出来るし、音楽も取り込んで聴く事や、同じハロ同士なら通信も出来る」

そう、俺がラクスに送ったタイプとは違うマスコットロボット、ハロである。

この世界の技術に合わせて俺が作った。

セシリアのハロはスカイブルーでセシリアをイメージしているカラ

ーリングである。

今度は一夏と筈に向き直り、一夏にも八口を渡す。

「セシリアとは色違いの白八口と赤八口だ。ソレもセシリアと同じ機能が付いている」

『ハ口、ハ口！！ イチカガンバレ〜！！』

『ホウキ！ ホウキ！ ヨロシクナ！』

次の瞬間、女子が俺の前に殺到した。

「ザラ君！！ 私も作って！！」

「アスランさん私にも作って！！」

俺は何とか抑える為にこう言った。

「悪いがアレは試作品で3つしか作れなかった。材料も切れたし、また今度な」

そう言いながら女子は渋々と撤退した。

その時、俺は織斑先生に呼び止められる。

「ザラ、材料があつたら作れるのか？」

俺はその言葉に材料があればと答えた。

「なら、私用に1機と整備部の連中にも作ってくれないか？」

「構いませんけど……」

「よし、これで無駄な書類整理から解放される」

かくして、ハロが整備部と職員室を『ハロ、ハロ』言いながらピョンピョン跳ねている光景が見られるようになった。

襲撃事件の事後処理が終わった時だった。

我がクラスに転校生が二人現れた。

一人は小柄で金色の髪をポニーテールにした男子。
もう一人は女子にしては小柄で銀髪をストレートにし、左目を覆う
眼帯が特徴的な鋭い目をした女子だった。

「それではお二人とも、自己紹介をお願いします」

山田先生の言葉に金髪の少年が先陣をきって自己紹介を開始する。

「初めまして、フランスから来ました。シャルル・デュノアです」

その自己紹介と共にざわめく教室。

「男……！？」

「男子よね？」

そのざわめきに俺は人差し指で耳栓をした。

「ハイ、そうです。ここに2人の男子がいると聞いてきたのですが……」

その肯定の言葉と共に教室が割れんばかりの黄色い声で染まる。

耳栓しておいて良かった。

一夏なんか耳を押さえてるぞ。

鼓膜は大丈夫だろうか。

それにデュノアも戸惑ってるよ。

しかし、デュノアか……

世界シェア第3位のデュノア社に嫡男がいたとは知らなかった。

何とかその場の喧騒を山田先生が抑えると今度は銀髪の少女に自己紹介を求めるが少女は無反応。

「ボーデヴィツヒ、挨拶しろ」

「了解です。教官」

織斑先生に諭されようやく少女は口を開く。

しかし、教官か。

確か、織斑先生はドイツ軍のIS部隊の教官をやっていたはず。
その為か？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その名前しか名乗らない自己紹介に流石の山田先生も啞然とした。

「あの……以上ですか？」

「以上だ」

取り付く島も無いとはこの事かと言わんばかりにボーデヴィツヒは自己紹介を切り上げた。

そして、一夏の前に歩み寄り、彼の頬を叩いた。

流石の俺も何事かと思う。

「何だよ!?!」

一夏の怒りの声も無視して彼女はこう言った

「認めない。お前があの方の弟など私は認めない」

その言葉と共に彼女は自分に割り当てられた席へと腰を下ろした。

(全く、IS操縦者とはこんな奴等ばかりか?)

俺はそう思いながら窓の外に視線をやるのだった。

第11話 アスラン5人と戦う

何ともインパクトの強い登場の仕方をした季節外れの転校生を加えた1組と2組の合同でのIS訓練が行われる。

俺と一夏とデュノアは何とか女子の波を掻き分け更衣室に到着した。

しかし、最近上級生も絡んでの人の波に俺は内心辟易していた。女子には彼氏がないのだろうか？

そんな邪推までしてしまう。

流石に初日からコレではデュノアもさぞ面食らうだろう。

案の定、走りつかれて膝に手を付いて荒い息をしている。

「何とか振り切ったな」

「ああ。しかし、毎度毎度する事が無いのか？」

一夏の言葉に俺は愚痴る。

デュノアも息を整えながら俺達に詫びた。

「ゴメンね……迷惑かけちゃって」

その言葉に一夏は気にするなと言っ。

俺も実際は気にしてない。

「兎に角、着替えるぞ。織斑先生の授業に遅れるなど自殺行為だ」

「ウオ!? もうこんな時間!？」

俺の言葉に一夏は慌てて着替える。

その様子を見てデュノアが俺達に背を向ける。

「それにしても……アスランって思いの他ガタイがいいよな」

「まあ、鍛えてるからな」

「それにしてもガタイ良すぎだろ? シャルル?」

その問い掛けデュノアは両手で顔を押さえながら真っ赤になる。

「うっうっうん、そうだね。あははは……」

何とも1組に雰囲気ガスガスしているのは気のせいだろう。

俺はそんな事考えながら織斑先生の講義を聞く。

「本日から実習を開始する」

『ハイ!!』

俺達は織斑先生の言葉に返事を返した。

「まずは戦闘を実演してもらおう」

まあ、俺が出る事も無いだろう。

ジャステイスを人目に曝す行為は織斑先生ならしない。

「鳳、オルコット」

「ハイ」

「ハイ」

「専用機持ちなら直ぐに始められるだろ？ 前に出ろ!!」

「めんどいな、何で私が……」

鳳は嫌々前が出る。

「は……何かこういうのは見世物の様で気が進みませんわね……」

セシリアも不満タラタラだ。

そんな2人に織斑先生が歩み寄り、小声で呟く様に言った。

「お前等少しはやる気を出せ。あいつ等にいい所を見せられるぞ?」

その言葉に俺は誰にいい所を見せるんだろ？

と、疑問に思った。

「やはり、ここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの
番ですわね！」

うお！？ 何か知らんがやる気になったなセシリア。

「実力の違いを見せるいい機会よね。専用機持ちの」

鳳も何かやる気出してるし！！

俺の後ろで一夏とデュノアが話す。

「先生、一体何話したんだろうね？」

「俺が知るかよ……」

会話は読唇術から解ったがあこの二人にとってカンフル剤になるかが
疑問の言葉だ。

「それでお相手は？ 鈴さんとの勝負でも構いませんか？」

セシリアは優雅にそう言うと鈴も望む所と鼻で笑う。

「フフン。コッチの台詞。返り討ちよ」

そのやり取りに織斑先生が割ってはいる。

「慌てるな馬鹿共、対戦相手は……」

織斑先生が対戦相手を言おうとした瞬間、上空で何か落下する風切り音が響く。

何だ？

俺が空を見上げると山田先生が上空から降ってきた。

しかし、凄い落ち方だ。

錐揉み回転しながら落ちている。

まるで撃破されたみたいだ。

俺はそう思いながら回避する。

しかし、回避が遅れた一夏が衝突。

不慮の事故で一夏が山田先生の胸を鷲掴みにして鳳がキレて双天牙月を連結して一夏に投擲した。

しかし、まあ、山田先生なら大丈夫だろう。

二発の銃声が当たりに轟き、双天牙月が地面に突き刺さる。

ラファールの兵装、51口径アサルトライフル、レッドバレットを構えた山田先生がブローン射撃で撃ち落したのだ。

しかし、いい腕だ。

その腕前を理解したのかセシリアは驚いていた。

まあ、見かけでは頼りないだろうが山田先生も元代表候補、コレくらい造作ないだろう。

どうやらセシリアはそれに気が付いている。

油断と慢心は敗北を自信と覚悟は勝利をと常に教えている。

冷静になって物事の本質を見ろとも教えている。

(いい目だ。油断は捨てたな。後は何処までやれるかだ)

俺はセシリアを見ながら考える。

(セシリアがキラほど動けたら……)

動けたらどういっつのだ!!

全く、下らん事を我ながら考えるな。

そうしている内に模擬戦は開始された。

まあ、結果は、最初に鳳が落とされ、セシリアも粘ったがやはり経験の差が上手くあしらわれ撃破された。

俺とセシリアは放課後、俺の部屋で紅茶を飲みながら今回の戦いの反省会を行っていた。

「セシリアは撃ち過ぎだな。短期決戦ならそれもいいだろうが、長期決戦だと辛くなるぞ」

俺の言葉にセシリアはその顎にてをやりながら唸る。

「ですが、今回は撃たざるを得ませんでしたわ。相手は山田先生ですし……」

そう、セシリアは自分より上の相手との対戦が少ない。

「チョット早いが俺と模擬戦でもするか？ 一応、俺も砲撃戦、射撃戦、至近距離戦と全てのレンジに対応出来るし」

「本当ですか？」

セシリアは嬉しそうに俺に問いかけた。

「ああ、実戦訓練からも学ぶ事があるだろう？」

「はい！ 学ばせていただきますわ！」

そう言いながら俺とセシリアは歩き出す。

翌日の放課後、俺は一夏、セシリア、箒、鈴、シャルの5人と一緒に訓練していた。

因みに箒と鈴とシャルにはファーストネームを呼ぶ事を許してくれた。

「そうだな、ここで5人の実力を知りたいし5対1で戦ってみるか」

俺の言葉にセシリア、一夏、箒は納得してそれぞれ得物を構えるが鳳とデュノアは躊躇う。

「え！？ 5対1！？ アスラン、それ冗談だよな？」

「アンタ！！ あたし達を舐め過ぎじゃない！？」

その言葉に一夏が緊張した顔で言う。

「悪いが、アスラン相手に常識は通用しないぞ。気合入れろ」

セシリアも額に薄っすら汗を流しながらライフルを構えた。

「そうですわ……覚悟して挑みなさいな」

箒も日本刀型兵装を構えながらアスランを睨む。

「ここではそんな慢心を捨てろ！」

その3人の様子に2人はコレはただ事ではないと自分達の得物を構える。

「では始めるぞー！！」

俺の掛け声と共に訓練は開始される。

ほう、セシリアは後方に下がって一夏と箒の援護とシャルと鈴のつなぎをやっている。

教えた通りだ。

俺はセシリアの射撃を回避しながら一夏と箒のツートップを牽制射撃する。

「ああ、クソ！！ 射撃が上手すぎる！！」

「このままではシールドエネルギーが減らされる」

一夏と箒は愚痴りながらも何とか回避する。

「一夏さん、箒さん！！ 一旦下がってくださいまし！！ 二人が突出したら援護射撃が出来ませんわ！！ シャルルさんと鈴さんは一夏さんと箒さん達の援護を！！ ここは一旦立て直して陣形を組み直しますわ」

セシリアめ、中々指揮官が様になってきているな。

「セシリア、何か手段があるの！？」

「一夏さんはトップで！ 箒さんは一夏さんの後方5メートル感覚で4時方向に！ 鈴さんは箒さんの7時方向に！ シャルルさんは鈴さんから5メートル後方7時の方角に！ 私はシャルルさんの後方7時の方角につけますわ」

その陣形の通りに並ぶ5人、まるでその姿は龍が鎌首擡げるような

姿だった。

成る程、俺が教えた陣形で龍陣、ドラゴンフォーメーション。先頭の一夏に求められるのは打撃力と機動性と打たれ強い体力が要求される陣形だ。

悪くない。

守っていてもジリ貧、バラバラに戦っていても各個撃破なら、俄かでも陣形を作り動き易くしたか。

後方のセシリアとシャルルが援護射撃を行い一夏と箒と鈴を助け、中距離戦の繋ぎとして鈴を配置、そして、追撃に箒、追い討ちに一夏か。

だが、その陣形は欠点があるぞ、セシリア。

ソレは一夏の白式の打たれ弱さだ。この場合の陣形は一夏をトップにすえて後方両翼に、箒と鈴、その中央にシャルル、シャルル後方10メートルにセシリアを配置した超攻撃型オフENS陣形、蜂矢の陣、ホーネットアローか、一夏をトップに後方両翼に箒と鈴、その後方左右にセシリアとシャルルを配置する魚鱗の陣、スケイルが最適だ。

俺は、一夏に集中砲火を開始する。

「龍は頭を撃たれたら死ぬ！一夏のISの打たれ弱さを考えるべきだったな！」

確かに一夏の零落白夜は協力だが、発動にはシールドエネルギーを大量に持っていかれる。

更にイグニッションブーストは燃費が悪い。

避けられてビーム兵器でも集中砲火を浴びせられればなんて事無い直ぐにエネルギー切れだ。

一夏がシールドエネルギーエンプティイになるとアレよアレよと総崩れになった。

こうして、俺との訓練は終了した。

第11話 アスラン5人と戦う（後書き）

はい、ここで5人いたしロマサガの陣形、龍陣を入れてみました。

まあ、蜂矢の陣や魚鱗の陣は武田信玄など戦国武将が陣形として使っていたものを入れてみました。

第12話 アスラン黒兔を取り逃がす

俺と一夏達が自由時間で実習を選択し訓練を行っている。

今は、一夏とシャルルが対戦中だ。

「それじゃあ、僕を捕らえられないよ？ 一夏」

シャルルは上手く牽制射撃で距離を取りながら一夏を相手取る。

「クソ！！ 散弾と通常射撃の切替が早すぎる！！」

一夏としては散弾と通常射撃の緩急がある射撃は経験が無いのか次第にシールドエネルギーをすり減らされる。

(シャルルの奴いい射撃だ。一夏の機動能力や零落白夜の特性、兵装を理解した上で……だがまだ甘いな)

俺はそんな事思いながら一夏とシャルルの演習を見ていた。

まあ、結果は一夏の惨敗。

俺とシャルルは一夏にレクチャーをしていた。

「一夏、お前は射撃兵装の特性を理解しきれていない。あれ程教えただろ？ 射撃兵装の特徴は大きく分けて3つ、一つ目は直線型射

撃、二つ目は面型射撃、3つ目は有効加害範囲射撃の3種類だ。シャルルはこの3つの内2つ、直線射撃と面型射撃のみで戦いを進めた。コレは一夏、お前が射撃特性を理解せず悪戯に直進しかなかったのが原因だ」

一夏は俺の説明を考えながら反論する。

「でもよ……俺の白式は接近戦兵装オンリーだぜ？ さらに悪い事にイコライザのバススロット容量事態が開いてないんだぜ？ 射撃兵装なんか搭載できないよ」

俺とシャルルはその言葉に考え込む。

「多分だけど……それってワンオフアビリティーの方に容量を使っているからだよ」

シャルルの答えに俺も思うところがあるのか考える。

「なる程な……だからバススロットが無いのか……だが、あの零落白夜は織斑先生のワンオフアビリティーの筈だ……何故一夏に？ そもそもワンオフアビリティーは各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のはず。詰まる所は人其々に違うんだが、何故だ？ 確か、論文で読んだ事があるが各コアにはそれぞれ好みが存在するらしくその好みと操縦者が一体となった時にワンオフアビリティーが発動し易いと言う内容だったが……」

シャルルも首をかしげながら考える。

「そうだね……疑問は其処だね。織斑先生の弟だから出来たって訳でも無いし……その論文も僕は読んだ事無いから何ともいえないけ

ど……」

俺とシャルルはお互いに首を捻りながら考える。
その間、一夏は置いてきぼりの格好だ。

「なあ、結局、俺に射撃兵装は使えるのか？」

その言葉に俺は何とも言えない表情で返した。

「使えると言えば使える。使えないと言えば使えない、と言った所か……」

俺の言葉にシャルルもウンウンと頷きながら答える。

「まあ、口で言うよりやってみた方が解り易いか……シャルル、ライフルをアンロックして一夏に貸してやってくれないか？」

「そうだね。その方がいいかも、でもアスランのビームライフルがあるはずだけど」

「あるが白式と言うよりジャスティス以外では使えない。俺のビームライフルはマニピレータードライブ方式だからな。ドライブが合わないとは撃つ事すら出来ない。たとえ撃てたとしても白式に限らず通常のISのエネルギー蓄積量だと20発撃てれば精々の燃費が悪い兵装だ。今の所は出力を落としてるが、最大出力時の通常射撃だと1撃で絶対防御が貫通、ISの装甲も貫通して地面に大きな穴が出来る程の威力だからな……収束射撃モードだと人間がミンチになって地面が吹き飛ぶ。下手に撃てないし貸せない」

ソレを聞いた一夏は黙ってシャルルのライフルを借りた。

シャルルも黙って一夏にライフルを手渡した。

正直、そんな危ない物一夏としても使いたくないらしい。

一夏はシャルルの射撃訓練を受けながら的を射抜いていくがどうも初心者の射撃だ。

その様子を見ていた女子3人は恨みがましそうに見ているが置いて置く事にする。

正直、女性に嫉妬は恐ろしい。

順調に射撃は進み、トータル43ポイント。

セシリアはスタンディング射撃、10秒で97ポイントとするなら初心者が始めて銃を撃つのでからまずまずだろう。

流石にキラみたいに行き成り、射撃初心者で10ホール全てに当てるのは早々ないだろう。

俺はジャステイスを頭部装甲以外の全てを展開する。

「まずまずだな。まあ、初心者にしては良くやったと言った所だ」

その言葉に一夏がムスとしながら俺に言う。

「じゃあ、アスランは射撃は得意なのか？」

その問い掛けに、俺は無言でターゲットを呼び出し射撃を開始した。

その瞬間、切れ間が解らない程の射撃速度でど真ん中を撃ち抜く。

結果はトータル100ポイント。

「まあ、コレだけ出来れば上等か？ 俺より射撃が上手い奴はここから5キロ先の標的を同じ速度で撃ち抜くからな……後、15キロ先から真ん中を撃ち抜く狙撃手もいるぞ」

まあ、前者キラで後者はディアツカだ。

事、射撃戦、狙撃戦になるとあいつ等の土俵だ。

ソレを聞いた瞬間、一夏とシャルルはもとよりセシリアも啞然とした。

明らかに人間の限界を超えた所業だ。

アスランですら人間超えた速度で射撃しているのにその上がいると言うのだ。

その言葉にセシリアが驚く。

「じゅ、15キロって……人間に例えるなら1500メートルの長距離狙撃ですよ！？ 専用のハイパーセンサーとライフルが無いと無理ですわ！！ 人間ですよ!？」

そう、セシリアだから理解できる異能さだろう。

彼女も狙撃の心得がある。

まあ、アイツは、ディアツカは事、狙撃一点“だけ”ならキラにす

ら勝つことが出来る男だ。『狙撃手になる為に生まれてきた男』とザフト軍全体でそういわれている。

派手好きのあの性格から本人は嫌がっているが。

余談は兎も角、俺は一夏に射撃の基礎を徹底的に教える事にした。

その時だった、周りが騒がしい事に俺が気が付く。

俺が騒ぎの現況を見つける。

アリーナピットカタパルト付近にそれはいた。

黒い装甲に右側に大きな砲。

アレは……

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの言葉に鈴がボーデヴィツヒを睨みつけながら質問する。

「何？ アイツなの！？ 一夏を引っ叩いたって言うドイツの代表候補生って！！」

筈も警戒感露ににらみつけた。

「織斑 一夏」

ボーデヴィツヒは周りの喧騒を無視して一夏を指名した。

「何だよ？」

一夏はシャルにライフルを返しながらボーデヴィツヒの問い掛けに答える。

「貴様も専用機持ちだそうだな？　なら話が早い。私と戦え」

「え？」

「嫌だ。理由がねえよ」

その言葉にシャルルが驚き、一夏は否定する。

「貴様に無くても私にはある」

「今でなくてもいいだろ？　もう直ぐクラスリーグマッチなんだからその時で」

その言葉でボーデヴィツヒの殺気が膨れ上がる。
不味い。

俺がそう思った瞬間、ボーデヴィツヒは右肩の砲身を展開する。

「ならば……」

そう言いながら行き成り発砲。

クソー！

俺はビームライフルを構え正射し、レール砲の砲弾を一夏とボーデ

ヴィツヒの中央で爆発させる様に撃ち落とす。

「何!?!」

ポーデヴィツヒは突如何が起こったのか理解できず驚きの声を上げる。

俺はその隙を逃さずイグニッションブーストで一気にポーデヴィツヒとの距離を詰めて居合いの要領で右マニピレーターで左サイドスカートにマウントされているビームサーベルを引き抜き、即座に最大出力でポーデヴィツヒの右わき腹に叩き込む。

「ゴハッ!?!?!?!」

訳も解らず何が起こったのか理解できないまま苦悶の吐息を吐くポーデヴィツヒ。

最大出力でもリミッター付きだから絶対防御は破壊できないが、その衝撃までは殺し切れない。自然とポーデヴィツヒは左横に吹き飛ばされる形でアリーナのシールドに叩き付けられた。

「ガッ!?!」

そのまま、地面に叩きつけられる格好でうつ伏せに倒れるポーデヴィツヒ。

俺は更にイグニッションブーストで移動し、ポーデヴィツヒの後ろから両足でポーデヴィツヒの両肩を踏みつけ銃口を頭に近づける。

「もういいだろ? これ以上無益だ」

俺の言葉にボーデヴィツヒは俺を睨みつけながら無言を貫く。

『其処の生徒!! 何をやっている!?!』

大音量で管制官の先生が注意してきた。

俺はボーデヴィツヒから飛び退き、ボーデヴィツヒに手を差し伸べた。

「立てるか?」

「無用だ!」

ボーデヴィツヒは悔しさと恥ずかしさと怒りで頬を赤らめながら俺の手を叩いて自分で立ち上がった。

その顔には薄っすらと泥が付いている。

ボーデヴィツヒは無言で立ち去った。

私ことラウラ・ボーデヴィツヒは今、屈辱の極みにいた。

その理由は先刻の戦闘、いや、一方的な戦いだった。

私の当初の目的は織斑 一夏の威力偵察に過ぎなかった。

だが、そこで予想外の、そして屈辱の結果に終わった。

最初はどうでもいい唯の男と思った。ISを唯のファクションとして考えないこの学園のレベルで学年最強など大した事無い。

悔っていた。

そう言われればソレまでだが、その悔りをした自分が許せない。

奴は私が放ったレール砲の砲撃を織斑 一夏と私との中央で狙撃した。

音速を超える速度で飛翔する弾頭を迎撃だと!?

ふざけた能力だ。

奴はソレだけには飽き足らず、私が認識できない速度で近付き私の横っ腹に斬撃を見舞った。

シールドや静止結界すら発動させない見事な奇襲だった。

そして、私はアリーナのシールドに叩き付けられ地面に這い蹲った。

コレではまるで私が敗者ではないか!!

私は怒りに任せて立ち上がろうとしたが両肩を足蹴にされ、後頭部に銃口を突きつけられた。

さらに奴は事もあるうに敗者である私に手を差し伸べた。

つまり私は敵とすら認識されていなかった。

軍人として、戦士として、また、ドイツ最強のIS特殊部隊隊長として、この上ない屈辱であり恥辱であり汚辱だった。

文字道理、私のプライドは泥に汚れ汚された。

教官が仕込んでくれたこの技術を奴は足蹴にした。

許せない!!

何より許せないのはあれ程の実力があるにも関わらずこの様なごっこ遊びしかない所で燻る奴自体が許せない!!

この際、もう織斑 一夏などどうでもいい!!

「アスラン……ザラ!! 赤い騎士王!!」

私はその男の名と異名を魂に刻んだ。

「奴は私の敵!!」

奴だけは私が倒す!!

第12話 アスラン黒兔を取り逃がす（後書き）

ラウラフラグがたったか？

第13話 アスラン女の喧嘩を止める

俺ごと一夏は珍しく箒が部屋に尋ねてきた事に何となく喜びを感じながらも部屋に招こうとした。

だが、箒は戸口でいいと言われ残念でならない。

「あのだな……」

「おっ……」

箒はシドロモドロになりながらも何かを言おうとしている。

しかし、此方もなぜか緊張する。

「わ、わ、私がトーナメントで優勝したら」

「優勝したら？」

「私と付き合ってくれー!!」

その言葉に俺は二つ返事で答える。

「買い物だろっ？」

「何で其処までの覚悟しなけりゃならないんだ？ 箒の奴？」

俺が教室に到着した時、いつも以上に騒がしい。

俺は鞆から教科書を取り出し机の中に仕舞い鞆を机横のフックに引っ掛けるとセシリアに質問した。

「セシリア、一体何の騒ぎだ？」

その質問にセシリアはその可愛らしい人形のような端整な顎に手をやりながら答える。

「多分、ですけど1年の間でクラスリーグに優勝したら一夏さんと付き合えると言う噂が流れていますわ」

俺は首を捻った。

「付き合つと言う言葉にも意味は色々あるだろ？ ソレは買いう物に付き合つとか食事に付き合つとかって言うオチじゃないのか？」

セシリアは苦笑しながらこう答えるしかない。

「まあ、一夏さんですし……そんな事……ありえますわね……」

「まあ、大方、箒か鈴が『優勝したら私と付き合え』と言ったのを聞き耳立ててた女子が広めて話が大きくなったと言った所だろう？」

「なんとも解り易い想像図ですわね……」

俺もセシリアの言葉に頷きながら答える。

「全く、一夏相手に付き合ってくれただけしか言わないとは……アイツの場合、「異性として貴方を愛しています交際して下さい」「くらい言わないと解らんとと思うぞ?」

「……それは貴方も同じでは?」

「何か言ったか? セシリア」

「いいえ、何も」

俺はセシリアの小声が聞きとれず、質問したがセシリアは優雅な振る舞いで俺の質問をいなした。

俺は授業中や休み時間でも視線を感じる。

犯人は解っている。

ポーデヴィツヒだ。

まるで此方を舐める様に見られる。

正直、奇襲や強襲される訳ではないのか今は静観しているが、正直、辟易してるのもまた事実。

困った者だ。

私ことセシリアは鈴さんと一緒に訓練していた。

なぜ、鈴さんかといえば、アスランさんの戦闘スタイルが比較的似通っているからである。

そう言う意味で戦略の研究や検証がし易い。

少しでもアスランさんの負担を減らして差し上げたい。

「何で私がアンタと訓練しなくちゃならないのよ？」

鈴さんは不満タラタラだが知った事ではない。

アスランさんが私とパートナーになってくれるのだ。

コレぐらいの愚痴は覚悟の上だ。

少しでもあの方に近付きたい。

あの方のパートナーとして恥ずかしくない自分でいたい。

それが今の私の目標だ。

その為には、あの方の為に私が出れることを私はしよう。

そう決めたのだ。

「と、言う訳で、訓練は私と鈴さんの1オン1、勝敗は相手のシールドエネルギーエンプティイでよろしくて？」

その言葉に鈴さんは挑発的な笑みを私に向ける。

「ええ、いいわよ。丁度、順位はつけたかったし」

「合図は譲りましてよ」

「あら、優しいじゃない」

その言葉に私は微笑みながら言う。

「淑女の慈悲ですわ」

「上等!」

私の言葉に鈴さんの闘志に火がついた。

(解り易い)

私は内心、鈴さんが策に引っかけた事に微笑んだ。

「行くわよ!」

そう言って鈴さんがスタートダッシュしてきた。

(案の定ですわ)

私が攻撃しようとしたその時だった。

「ッ!」

ハイパーセンサーに警告ですって!?

私と鈴さんはその場を飛び退く。

その中央を超高速の弾道が通り過ぎていった。

そしてお互い飛んできた方角に兵装を向ける。

「弾道が放電していた!？」

「レール砲……ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

ハイパーセンサーの索敵で直ぐに見つかった。

相変わらず高い所がお好きなのかアリーナピットカタパルトの射出口に立っていた。

「アンタ!! 如何いうつもり!? 行き成りぶっ放すなんて!？」

鈴さんの言葉に耳も傾けず一人で喋り出すボーデヴィツヒさん。

「中国の甲龍に、イギリスのブルーティアーズか……」

その言葉と共に突如、鼻で笑うボーデヴィツヒさん。

「フツ、カタログスペックを見たが、実物を見るとたいした事が無いな」

どうやらその言葉に鈴さんは頭にきたのか声を荒げるが今さらだ。

アスランさんのインフィニットジャスティス。
アスランさん曰くガンダムタイプISと言うカテゴリーズされるISと比べると私達のISなどどうしても見劣りしてしまうのもまた事実です。

実際、アスランさんの話を聞くだけで詳細データまでは見た事が御座いませんが、アスランさんの話を聞く限りではあの篠ノ之博士すら開発不可能な技術のオンパレードだと思えますわ……

それは兎も角、私はどうでもいいと言わんばかりに鈴さんに語りかける。

「鈴さん、礼儀を知らない人間に礼儀を諭すのは構いませんが、私達に時間が無いのもまた事実。ここはコレまでとして、練習を再開いたしませんか？」

その言葉に鈴さんは私に噛み付いた。

「ちよつと！！ セシリア！？ アンタ！！」

私は鈴さんの目の前に手を翳しながらボーデヴィツヒさんにごう言った。

「貴女のターゲットはアスランさんでは無くて？ ソレを態々、私達に喧嘩を吹っかける理由は何処にありますの？ 多分、アスランさんをおびき寄せる餌にする為では無くて？」

その言葉にボーデヴィツヒさんの眉根が僅かに上がる。

「沈黙は肯定と受け取りますわ。貴女はアスランさんをずっと監視

していた。多分、奇襲、強襲の隙を窺っていたのでは？ でも、その隙は微塵も無かった。違いますか？」

これまたボーデヴィツヒさんは沈黙を貫く。

「そこで、貴女は私達と戦い、騒ぎを聞きつけたアスランさんとなし崩し的に戦う事を選んだ。何故ですか？ 貴女が真に強者の自負をその胸に抱くならトーナメントに出れば確率的にアスランさんと当たれるはずですよ。更に、公衆の面前でアスランさんを撃破できれば貴女とドイツの有用性は国内外に響き渡りますのに。何故、ソレをしないと？」

その言葉にボーデヴィツヒさんは言います。

「こんな極東の島国の学園で見世物小屋宜しく戦うなど私の矜持が許さん。それにあの男、アスラン・ザラは私に恥をかかせた。私だけでない。教官の技術すらあの男は足蹴にしたのだ。この場で倒さなければ私のプライドが許さない」

その言葉に私が考えながら言う。

「教官とは織斑先生のことですか？」

その言葉にボーデヴィツヒさんは怒りを剥き出しにして目を見開いた。

「貴様如きが教官の名を軽々しく呼ぶな！！」

そう叫びながら彼女は私目掛けレール砲を撃ち込むが私はアンバツクを使って回避した。

「弾道が読み易いですわね。もう少し、考えて砲撃をする事をお勧めいたしますわ」

私の言葉に怒りを露にするポーデヴィツヒさん。

「いいだろう、生かして置く心算だったが貴様は血祭りに上げる。セシリア・オルコット」

「あら、悪役臭い台詞です事、もう少し優雅な言葉で表現できませんか？ アスランさんなら私以上に優雅な言葉で舌戦をしましてよ？」

その言葉にポーデヴィツヒさんは鼻で笑った。

「フン、言葉を開けばあの男の名。全く、あんなアイドル気取りで織斑 一夏と戯れるガチホモ野郎の金魚の糞風情が言ってくれる」

今、何と言った、この女。

アスランさんを侮辱した？

……

……

……

……クロス……

負け黒兔さん」

ここでも私はあの女に失笑と共に事実を突きつける。

「殺す！！」

「上等ですわ！！」

その瞬間、私とあの女はバトルを開始した。

あの女はワイヤーブレードを数機展開し私を取り囲む。

が、遅い。

余りに遅すぎる。

「スロー過ぎて欠伸が出ますわ！！」

私は、アンバックとバレルロール回避を併用して距離を取る。

「クツ！！ チョコマカと！！」

私は動きながらライフルをラウラさんに正射した。

ラウラさんはワイヤーブレードを引き戻し、回避行動を開始した。

だけど、させませんわ！！

私はブルーティアーズをパージしてあの女の周辺に不規則機動を取らせて砲撃させる。

「クツ!! ここまでビットを操れるか!? 舐めていた」

そんなに数がいたのではAIC、静止結界は使えないでしょ?

悪いですが、アスランさんから情報はしっかりと貰っていましたよ。

AICの弱点、それは一方方向に強く、実弾兵装には協力無比ですが、ソレはあくまで正面での戦闘の話であり、認識できる速度だからこそすわ。

更に膨大な集中力が不可欠。

このBTに搭載されているレーザーは光速、つまりはその弾は光の速度で動いていますわ。

それを認識出来るのははつきりってアスランさんくらいですわ。

更にオールレンジ攻撃をしながら本体も攻撃に加わる計五方向からの攻撃、コレを早々かわせませんわよ!!

「だが、甘いな!!」

そう言いながらあの女はイグニッションブーストをして、私に加速した。

「ビットもコレだけ近付かれては使えまい!!」

その通り。

ビットはあくまで移動砲台。

ビットの弱点は急加速による接近戦ですわ。

でも、私にはアスランさんから仕込まれた“切り札”がありましたよ。

プラズマ手刀を展開して、接近戦を試みる。

もう少しですわ。

その時だった。

突如として邪魔が入る。

織斑先生とアスランさんだ。

「やれやれ……これだからガキの相手は疲れる」

「セシリア、君らしくないぞ！！ 冷静になってこの場は引け！！」

そう言われて頭の上っていた血が引いていくのが解る。

あの女も毒気が抜かれたのか刃を納める。

どうやら女子生徒が呼んで来たのだろう。

鈴さんは私達の試合を観察していた。

抜け目がありませんわね……

「訓練するのは構わんが、アリーナを破壊されては堪らん」

その言葉に私は周りを見た。

確かに、アリーナのグラウンドは穴だらけで観客席のコンクリートも所々穴が開いている。

コンクリートが内部から吹き飛びアリーナ内部のシールド発生装置に当たって壊れていた。

戦いの凄まじさを物語っていた。

突如、アスランさんは私の耳元で話す。

「セシリア、 “アレ” まだ完成段階じゃないだろ？ 使うのが早すぎる」

「ですが!？」

「完成させるからソレまで使うな。いいな？」

「はいですわ……」

その言葉に私は項垂れて答えるしかなかった。

「おい、ザラ。オルコットの手綱くらいしっかり握ってる。アリーナが壊れかけるまで戦わせるな。修理費も馬鹿にならんだぞ？」

「解りました……」

アスランさんは頭を下げると私を伴ってアリーナを後にしました。

「って、私の存在忘れてるわよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

鈴さんが叫びますが知った事じゃありません。

私にとってアスランさんが最優先です。

第14話 アスラン主になる

セシリアとボーデヴィツヒの私闘から数日。

セシリアとボーデヴィツヒは顔を付き合わせることに睨み合いをしていた。

正直、女同士の戦いとは男にとって真に恐ろしいもので見れたものではない。

俺は居心地悪い空間から逃げる為にどうにかあの手この手で2人の接触を避けている。

織斑先生の通達でリーグ戦前の一切の私闘を禁止された事からも彼女達のフラストレーションはたまる一方だ。

まあ、セシリアの怒りの理由は解っているだけに嬉しく思う反面、この状況にも辟易しているのもまた事実であった。

一夏は同じ部屋のシャルルと組む事が判明した。

同じ部屋でもあの二人の仲の良さは尋常じゃ無い気がする。

一夏に男色の趣味は無かった筈だが。

まさか、目覚めたとかいう冗談は止して欲しい。

まあ、一夏の目線から一夏もヤツパリ男の子なんだと言う事が解

る。

たとえば、無意識で篝の胸を見てたり、鈴のお尻を見てたりと無意識で男としては枯れていないらしい。

2人もその手の視線に曝される経験が無いのかそれともあからさまではないのか気が付かない所ではあるが。

俺はその事を指摘しない事になっている。

同じ男だ。

解らんでもない。

だが、若いな。

その目線を隠せる様にならないといけないぞ。

敏感な奴は気付いて指摘するからな。

余談は兎も角、数日はあつと言う間に過ぎていく。

いよいよ、クラスリーグマッチが開かれる。

俺、一夏、シャルルは更衣室のモニターでその様子を見ていた。

「しっかし、スゲー人だな……」

一夏は感心しながらもモニターを見つめた。

「3年はスカウト、2年は今までの成果を発揮する場だからね」

シャルの言葉に俺は頷きながら答える。

「ISを保有するイコール強大な軍事力を持つと同義語だからな。幾らアラスカ条約で軍事目的の使用を禁止していても軍事力としての抑止力は働いているんだろう。ISは兵器としてみたら破格の戦闘能力だからな。しかも機体数は限られている。ソレこそ有能な人材を乗せて国家の力とするのは自明の理だ。更に言うならIS開発競争も今後激化する。その為に各企業も優秀な人材をスカウトしたいのは企業の本音だ」

その言葉を聞いて一夏もシャルも苦い顔をした。

まあ、一夏はISが単なる競技程度に考えていたのだろう。

シャルルは父親がデュノア社の社長だ。

余りいい話をしている訳では無いのが解っているだけに余りするべき話では無かったかもしれない。

暫くして、対戦表が画面に映し出された。

「おいおい……」

「こねって……」

「組み合わせの妙と言う奴が……成る程、これまた面白い」

上から一夏、シャルル、俺の順番に口を開く。

其処には1年第1試合が俺とセシリアのペアー対ボーデヴィツヒと
第のペアーだった。

これは何とも。

「行き成り、1年の決勝戦だね……」

シャルルはそう言いながら画面を見つめた。

「ああ……」

一夏もそれに同意する。

別に、決勝と言う気持ちは無い。

俺にとって戦いとは正に命懸けだ。

軍隊と言う所において戦場を経験すると死ぬ時は英雄だろうが頂点だ
ろうが死ぬ時はアツサリ死ぬものだ。

「まあ、結果は如何あれ、勝ちに行くさ」

俺はそう言いながらスポーツドリンクを飲んだ。

私こと篠ノ之 篤は目の前の対戦表に驚いていた。

「まさか、このような事になるとは……」

そう、嘗ての自分に似ているラウラ・ボーデヴィツヒと組むしかも相手はアスランとセシリアのペアー。

何と言う事だ。

こんな事があり得るのか？

ボーデヴィツヒはあの頃の私と同じだ。
力を信奉し唯、力を追い求めた頃の私と。

今の私ではどんなに頑張ってもアスランには及ばない。
セシリアもアスランの元でメキメキと力をつけて来ている。

その成長速度は異様と言ってもいい。

それこそ、私が劣等感を抱くほどの成長速度だ。

勝ちたい。

ソレが私の素直な感想だが同時に勝てないという、相反する感情が渦巻いていた。

俺とセシリアはピットカタパルト前で待機していた。

『それでは、1学年クラスリーグマッチを開催いたします』

ソレを聞いた俺はカタパルトまで歩み寄る。

「それじゃあ、セシリア、戦場で待ってるぞ?」

その言葉にセシリアは頷きながら微笑む。

「ええ、私も直ぐ後を追いますわ。アスランさん」

俺はセシリアに人差し指を突き出し、ソレをセシリアの口に当てる。

「アスランだ。お前は俺のパートナーなんだ。そんな他人行儀に呼ばないでくれ」

その言葉にセシリアは頬を赤らめながらも反論する。

「ですが……」

「アスラン、だ」

セシリアは何故か照れ臭そうに俯き加減でモジモジしながら頬を更に赤らめ俺の名を呼んだ。

「……アスラン……」

「よし！」

俺は嬉しそうに笑いながらそう言った。

「その笑顔は反則ですわ……」

小声で何を言っているのか解らないがまあ文句だろう。

「さあ、行こう。セシリア、俺の背中、お前に預ける。その代わりに、お前の前は俺が絶対に守る」

「ええ！！ アスランの背中、このセシリア・オルコットが死守いたしますわ！！」

その言葉にセシリアは真っ赤になりながらも微笑みをその端整な顔に湛えながら力強く答えてくれた。

何か、背中が温かい。

この世界に来てから感じた事の無い暖かな背中。

ああ、そうか俺はパートナーが欲しかったんだ。

この空虚な背中を守ってくれるそんな存在が。

C・E・ではキラがそうだった様に、今はセシリアがパートナーなんだ。

俺はそう思いながら俺はこう言った。

「体が軽い……こんな幸せな気持ちで戦えるなんて初めてだ……もう何も怖くない！」

俺はジャステイスを起動させる。

俺はカタパルトを思考制御で操作し、ジャステイスを固定させる。

「アスラン・ザラ、ジャステイス、出る……！」

そついい発進させるとジャステイスは戦場へと舞い上がった。

セシリアはアスランが飛び立った後を見つめながら考える。

「私は、貴方に認められたのですね……アスラン」

セシリアは心躍らせながらカタパルトに乗り込みブルーティアーズをロックする。

「セシリア・オルコット、ブルーティアーズ、行きますわ……！」

そついいセシリアは飛び出していった。

自分のパートナーが待つ戦場へ。

俺は上空でバレル上昇しながらVPS装甲を展開する。

その瞬間、会場中がどよめく。

そして、上空で静止し、ユックリと地上へ下り立つ。

其処にはボーデヴィツヒと箒がいた。

暫く無言で睨み合う3人、セシリアも其処に加わる。

役者は揃った。

後は開始の戦鐘が鳴らされるのを待つばかりだ。

『それでは、第1回戦、アスラン・ザラ、セシリア・オルコットペアー対、ラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之 箒ペアーの試合を行います』

その瞬間、俺はビームライフルを構え、セシリアはレーザーライフルを構える。

ラウラはレール砲を正面に展開し、箒は打鉄の日本刀型兵装を構える。

『始め!』

「「「ツッ!」「」」

4人は一斉に空へ飛び立った。

俺は即座にセシリアに指示をだす。

「セシリア！ アタックフォーメーション?!」

「了解ですわ!」

その瞬間、俺が前衛、セシリアが後衛の陣形を取る。

そして、ラウラが発砲するが俺が射撃したと同時にセシリアがスイッチした。

ラウラはシールドを展開するが俺の射撃でシールドが粉碎される。

「何!?!」

セシリアのレーザーを筈も何とか防御するがエネルギーは持っていかれる。

それをお互いが複雑な機動を描きながらスイッチングしていく。

「クツ!?! 何て複雑なスイッチングだ! 複雑なスイッチング途中で射撃しているだ?! あいつ等自滅する気か!?!」

ポーデヴィツヒは回避しながらも叫ぶ。

そう、下手に動くと高速でお互いがぶつかるとし、複雑な機動のスイッチング中に射撃などフレンドリーファイヤーだ。

何故、意思疎通が出来る!?!

ラウラの顔にそう書いていた。

まあ、セシリアとの個人練習で腐るほどこれはやった。

だから、セシリアの移動速度に合わせて俺が動けばいいだけだ。

よし、ボーデヴィツヒと箒の分断に成功。

『セシリア、作戦第1フェイズは完了。第2フェイズへ移行する』

『了解ですわ』

プライベートチャンネルで音声通信をしながら俺達は連携を取った。

ボーデヴィツヒ、悪いがコレはチーム戦だ。

先ず箒から片付ける。

俺はビームライフルをリアスカートにマウントしてビームサーベルを引き抜くとイグニッションブーストで接近し左から右へ横薙ぎに切り払う。

「な!?!」

箒は反応できずに切り裂かれ、シールドの3分の2を消費する。

しかし、ボーデヴィツヒは俺に砲撃しようとするが甘い。

セシリアが牽制砲撃でボーデヴィツヒを足止めすると同時にビット

を射出し箒に砲撃する。

そして、箒はまともにビットのレーザーをくらいシールドエネルギーがエンプティーとなる。

「クッ!?!」

箒は悔しそうに歯噛みした。

開始早々30秒で撃破されたのだ。

悔しさも解る。

『箒の沈黙を確認。次は本命だ。抜かるなよセシリア』

『当然ですわ。アスラン』

プライベートチャンネルでやり取りして作戦は最終段階であることを告げる。

セシリアもその声を持って答えた。

「足手まといがいなくなつて楽になった。感謝する」

ボーデヴィツヒはそう言いながらレール砲を乱射するが俺とセシリアは簡単に回避して倍返し of 射撃を浴びせる。

「クッ!?!」

ボーデヴィツヒは何とか回避するがそれでも間に合わず次々とビー

ムとレーザーを喰らう。

俺は接近戦を仕掛けるべくビームライフルをマウントしてビームサ
ーベルを引き抜く。

そして、イグニッションブーストでボーデヴィツヒとの間合いを詰
めた。

しかし、ボーデヴィツヒもイグニッションブーストを機動し、俺の
間をすり抜ける。

「先ずは邪魔なお前からだ!!」

目的はセシリアか。

セシリアに接近戦を挑む気か。

セシリア、“切り札”を使うときだぞ。

私はあの女、セシリア・オルコットに強襲を掛ける。

(接近戦兵装はナイフ一本のみ。ならば、プラズマ手刀で切り刻む
!!！)

そして、私はあの女の懐に潜り込みプラズマ手刀を展開した。

「取ったぞ!!」

私は撃破を確信した。

しかし、あの女は笑っていた。

私はあの女、ラウラ・ボーデヴィツヒがまんまと此方の策に乗ってくれた事に笑みが零れますわ。

（なんて迂闊な）

私はレーザーライフルを粒子化して消し去り、両手に切り札を用意した。

そして、あの女の直線的な突きを足を滑らすように回避して両手の切り札を構える。

そう、これはアスランが開発したレーザーアックスライフルショットキー。

銃身を極限まで切り詰め、アスランが開発した超小型レーザー発生装置と低電力消費型ドライブを搭載したハンドガン型レーザー銃ですわ。

バレル下部にはアンチビームコーティングされた小型アックスが装備されていますわ。

つまり、近接格闘から近接射撃の2種類の用途に対応した私だけの

何だ！？ ボーデヴィツヒの様子が可笑しい？

次の瞬間、ボーデヴィツヒのISが何やら黒い物体と化しボーデヴィツヒを飲み込んだ。

「いやあああああああああああああああああ！！！」

ボーデヴィツヒの悲鳴と共にボーデヴィツヒは黒い物体に飲み込まれていく。

そして、突如鳴り響く警報。

『緊急事態発生。レベルD以上の緊急事態が発生しました。全試合は中止。来賓、ならびに全生徒は速やかに非難。教師部隊は速やかに鎮圧を行って下さい』

アリーナの観客席シャッターが一斉に下ろされる。

どうやらアレはただ事では無いらしい。

そして、黒い何か人が形作る。

そして、ソレは剣を持った何かになった。

そして、次の瞬間、俺に斬りかかる。

しかし、その速度が尋常じゃない。

(速い!?)

俺はシールドを突き出しビームシールドを展開した。

「重たい!? クツ!! 俺にシールドを使わせた!? 何だあれは!?!」

人形の剣は弾かれ踏鞴を踏みながら後退する。

俺はビームサーベルを引き抜くとソレを構える。

しかし、俺が踏み込もうとした瞬間、一夏が割り込む。

「くっそおおおおおおおお!! 千冬姉の真似しやがって!!」

次から次へと何だ!?

しかし、一夏の剣は軽くかわされカウンターを貰う。

弾き飛ばされた一夏は地面に叩きつけられながらも立ち上がり向かおうとする。

「おおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「一夏!! 一体如何した!?!」

俺はビームキャリーシールドのグラップルスティンガーで一夏を拘束した。

グラップルスティンガーの捕獲部分に捕らえられた一夏は叫びながらもジタバタした。

「何すんだよアスラン！？ アイツは千冬姉の真似してる奴を俺は倒さなきゃならないんだ！！ 邪魔するなお前も！！」

流石にキレた一夏を放置する訳には行かず正気に戻す為にぶん殴った。

「ゴハッ！？！？」

「落ち着いたか？」

殴られた頬を押さえながら一夏は俺を睨みつける。

「理由を話せ。今のお前は正直、理解不能だ」

俺の言葉に一夏は怒り心頭で怒鳴る様に答える。

「アイツ、千冬姉の真似してるんだよ！！ あの剣技は千冬姉のものだ！！ ソレを他人が真似するなんて許せねえ！！ ぶん殴つてやる！！」

クダまく一夏を俺は反対側の頬を殴り飛ばした。

「いい加減にしろ！！ お前は唯、お前の思い出を汚されるのを恐れて怒っているだけだ！！ 織斑先生を理由に甘えるな！！ 織斑先生を理由にして暴れるな！！」

俺の叫びを聞いた瞬間、冷や水を浴びせられた様に大人しくなる。

「悪いが、一夏。お前は織斑先生の背中しか見ていない。周りを見
てみる？ ここには箒がいる。セシリアがいる。鈴もいる。シャル
ルもいる。そして及ばずながら俺もいる。お前が全て守りきるには
チヨット人数が多いぞ？ 更に言うなら一夏、お前一人で何人を守
りきれぬ？ 全員は無理だろ？ 俺も全員守りながら戦うなんて不
可能だ。だから、仲間がいる。俺を支えてくれる仲間が……なら言
えよ。一緒に戦ってくれ……助けてくれ……頼るのは弱さ
じゃないんだ」

一夏は周りを見た。

其処には箒が、セシリアが、鈴が、シャルルが俺がいた。

「それとも、俺達が頼りないか？ なら、俺はお前に友と認められ
ていない証拠だな」

俺はそう言いながら苦笑した。

俺はアスランの言葉を聞いた瞬間、自分が小さく見えた。

そうか、この怒りは千冬姉の剣を汚されたからじゃない。

俺自身の思い出を汚されたから怒ってたんだ……

アスランの言うとおりだ……

俺は千冬姉に甘えていただけなんだ。

千冬姉を理由に暴れていた。

そう言われた瞬間、俺は何もする事が出来なかった。

俺自身が俺自身に振り回されている。

千冬姉が言ってたっけ。

『武器に振り回されるな。武器の主になれ』って……

俺は結局、自分の力に酔って振り回されただけだった。

さらに悪い事に千冬姉の剣を理由にして暴れていただけの事だ。

情けなさ過ぎて涙が出そうだ。

「アスラン、もういい。俺は確かに千冬姉を理由に暴れたただけだ。認めるよ。自分の弱さを、でも、俺の思い出を汚されたんだ。黙って見ていられない。俺は俺の誇りの為に戦う。千冬姉でも誰でもない俺自身が俺自身の誇りの為に戦いたい。だから……」

俺が言葉を言おうとした時、箒は答える。

「安心しろ！ お前は私が守る。だから思いっきりやれ！」

鈴も答える。

「一夏！ 負けたら承知しないわよ？」

シャルルも答える。

「一夏、負けたら女装して校内一周だからね？」

セシリアも答える。

「アフターサービスはお任せを」

そして、アスランも答えた。

「後の事は気にするな。俺が何とかする。織斑先生への言い訳もな？」

ああ、俺にはこんなに支えてくれる仲間がいる。
こんな嬉しい事は無い。

俺は零落白夜を展開して光の刃を形成する。

「来いよ、偽者野郎。俺自身が相手だ」

確かにコイツは千冬姉の剣技だ。

だが、それだけだ。

織斑 千冬ではない。

俺は偽者の袈裟懸けをかわすと縦一文字に刀を振り下ろす。

突如、ボーデヴィツヒを包んでいた外壁は剥がれ落ち、奴が出てきた。

「これでいい。俺も、人の事言えねえしな」

こうして、事件は一先ずの終息を見た。

暫くして俺は今回の事件の資料を作成、織斑先生に提出した後、教室に帰った。

そして、其処にはシャルルの姿が無い。

そして、何だか歯切れの悪い山田先生が現れる。

「えっと、また、転校生を紹介します」

「シャルロット・デュノアです」

「なんと、デュノア君は、デュノアさんでした……」

何とまあ、どう言えば良いのやら……

「すると織斑君はデュノアさんと一緒に暮らしていた事に……」

一人の女子の一言で筈が激昂、ISフル武装の鈴まで乱入する騒動となった。

その騒動が鎮静化した後、突然ラウラが教室に入ってきた。

「アスラン・ザラ」

「何だ？ ボーデヴィツヒ？」

その言葉に全員の緊張が走る。

「織斑 一夏から聞いた。貴様は奴等の師匠だそうだな？」

その言葉に俺は苦笑しながら答えた。

「確かに俺は戦い方を教えているが師匠なんて大層な物じゃないさ」

俺の言葉にボーデヴィツヒはこう答えた。

「なら私を弟子にしていたきたい。マイスター」

は？

「日本では師匠をドイツ語にするとマイスターになるだからそう呼ばせてもらう。貴方の強さに感銘を受けた。どうか私にその戦いのご指導を」

何だか前途が多難だ。

更に、一人の女子の一言を聞いたラウラの一言が場を混乱させた。

「まあ、マイスターの略にはご主人様って言う意味もあるわね……」

「フム、ご主人様が……それも悪くない……我が主と呼ばせてもら
うか？」

ソレは止めて!!

俺が通報されるから!!

マジ止めて!!

くそ、何でだ!?

何かセシリアの顔は笑ってるけど目が笑っていな!?

コワ!?

誰か助けてくれ!! 切実に!!

第14話 アスラン主になる（後書き）

セシリアのオリジナル兵装はストライクノワールとケルディムの兵装を参考に考えました。

第15話 アスラン狂奏曲第1章女神達の狂乱

日曜日、基本的には休みの日、俺は久しぶりに惰眠を貪っていた。

ジャステイスの整備を第二整備室で行っていた。

無論、整備科の生徒や教師に触れさせない為、織斑先生に許可を取り、皆が撤収した午後8時に行った。

その為、中々時間が掛かり気が付けば午前1時だった。

其処から片付けや何やらと行っていたら午前2時になっていた。

部屋に帰り、倉持技研からの依頼で頼まれた打鉄の改良案を纏め上げた時には既に午前4時だった。コレが俺の貴重な収入源の一つだ。日本政府の補助金と倉持技研の開発依頼とテストパイロットの仕事、IS学園のISの改良が俺の生活基盤といってもいい。この3つが無くなると俺は無一文だ。

一応の蓄えはしているがチョット辛い。

因みに俺の今の貯金総額は350000000だ。

あま、特許料やら貴重なISを操縦出来る男だから貰えるお金は多い。

後は株取引などで儲けた。

必要経費は学費と車の維持費と服と食事代くらいだろう。

まあ、この3つが俺を手放す訳が無いから一応は安定した収入である。

俺はシャワーを浴びて疲れを取るとTシャツと短パンと言っていたいでたちでベットにもぐりこんだ。

俺はスタンドに備え付けられた時計を見たときには午前7時。

(三時間か……もう少し寝よう。今日は日曜だし予定も何も無い……)

そう思いながら俺は寝返りをした時、何か柔らかい物体に腕と足が当たる。

「は？」

何だコレは!?

俺の頭は一気に目を覚ました。

俺が布団を退けると其処には何も身に着けていないボーデヴィッヒがいた。

正確には自分のIS、シユヴァルツェアレーゲンの待機状態であるレツグバンドだけと言った状態だ。

「悪いが、俺は君を弟子にしたわけでも、まして！！ 君を従者にした覚えは更々無い！！」

俺は取り敢えずベッドに胡坐を掻いて座るとポーデヴィツヒに説教することにした。

「悪いがコレは決定事項だ！！ 異論は認めん！！」

「お前、本当にその態度で俺に弟子入りしたいの！？」

もう、最近の娘の思考にお兄さんついていけません！！

まあ、兎に角、説教だ。

「ポーデヴィツヒ、あのな」

「ラウラだ」

「だからポーデヴィツヒ」

「ラウラだ」

「だから……」

「ラウラだ」

ええい！！ 話が進まん！！

「もういい、ラウラ、あのな」

俺は諦めてファーストネームを呼ぶ事にした。

何故かファーストネームを呼ばれた瞬間、ラウラの目がキラキラ輝いたのは俺の気のせいだ、きっと。

「何故、裸で俺のベッドに潜り込んだ？」

コレこそ俺が聞きたかった事だ。

「それはだ」

「ソレは？」

「日本には“内弟子”と言う素晴らしい制度があると聞く。師弟が寝食を共にし、24時間師匠の戦闘ノウハウを教えられると言う素晴らしい制度だそうだ。更に日本には裸の付き合いなるものがあるとかソレを実演してみた」

間違っ て無いけど間違っ てる!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

誰だ!!! ラウラに変なこと吹き込んだ奴は!? 今なら漏れなくジャステイスの全リミッター解除でミートイアフルバーストをプレセントだ!!!!!!!!!!

兎に角!!! ラウラのその間違っ た知識を正さねば!!!

日本が変態国家と勘違いされる!!!

「あんな、ラウラ……」

俺がそう言った瞬間、ラウラが俺の腕に組み付いてきた。

「先ず寝技からご教示願いたい。マイスター」

よ、横四方固！？

クソ！！ 不意打ちだから完全に極まっている！！

よりによって一番脱出困難な寝技を使いやがって！！

しかもラウラの胸が俺の顔に当たってる！？

「退ける！！ ラウラ！！ 胸が当たってる！！ 頼むから退ける

！！」

「フッフ……どうだ、マイスター、私の寝技は？ 完璧だろ？」

意味不明！！！！

そんな時だった、突如、ドアをノックする音が響き渡る。

「アスラン、セシリアです。入りますわね」

そう言いながらセシリアは俺の部屋に入ってきた。

(ノックしたなら部屋の主の返答を待つのが礼儀では！？)

俺は何処か他人事のようにそんな事思いながらセシリアに突っ込みを入れる。

「ああ、アスラン、今回の訓練ですけど……」

セシリアはそう言いかけて言葉が止まった。

これは不味い！！

非常に不味い！！

明らかに今の状況を見るならラウラが俺に裸で抱き着いている構図だ。

俺の部屋に奇妙な沈黙が支配した。

俺はラウラの腕が緩んだのを見計らい脱出に成功し、セシリアの顔を見た。

驚愕と赤面で何とも言い難い顔である。

「な、な、な、な……」

あ~~~~~……気持ち解るがセシリア、誤解だからな。

と自分の心で言い訳を試みるが、何処から如何見ても今の状況はラウラが俺に抱きついている様にしか見えない訳で……

「無作法な奴だな。師弟の寝室に入ってくるとは……」

「師弟……！？」

ラウラとセシリアのやり取りを聞きながら俺はリアルに頭を抱えた。

「そ、そ、それを言うなら私がアスランの一番弟子でありパートナーですよ!? ソレを!？」

確かに君は俺のパートナーだけど一番弟子では無いから!!
そもそも俺に弟子はいないから!!

「フツ、所詮、順番が早かったただけだろう? 私はアスランに最も近い“内弟子”。貴様如きが介入できるスペースなど空いていない」

何? このやり取り?

「私とアスランは私のパートナーですわ。それこそ、弟子風情が介入出来る余地と余白はございませんの。スープで顔を洗って出直してきてくださいな」

ソレを言うなら味噌汁だ。セシリア。

「貴様こそ、アスランは我が主、ご主人様だ。パートナー風情が口を挟む結われは無い」

「あゝら、使用人風情が主のパートナーとの間に入る余地こそ無くてよ?」

何コレ!?

怖いんですけど!?

二人の目から光線が出てるんですけど!?

中間地点で火花が散ってるんですけど!?

「悪いが今、寝技の訓練中だ。邪魔をするなら帰れ」

ラウラがそう言いながら俺の腕を引っ張って体に密着させた。

ブチ

そんな効果音がセシリアから響いた気がした。

セシリアは俯き加減に突如暗く笑い出した。

「ふ、フフフフ……」

こ、怖い……

本気で怖い。

今まで対峙したどの敵よりも怖い。

そして、セシリアは突如として服を脱ぐ。

何故に脱ぐ？

そして、セシリアはブルーローズの刺繍があしらわれた青いブラと
ショーツ姿になった。

黒のニーソックスとのコントラストで中々の色気をかもし出している。

って、何、悠長に観察してるんだ俺!?

止めるよ!!

自分へのツツコミも虚しくセシリアは天使の微笑みをその端整な容姿に湛えながら俺の所まで歩み寄る。

「私、こう見えて、寝技は得意ですよ?」

聞いた事無いし!!

「あら、淑女の嗜みですわ。アスラン」

何故、心が読める!?

「大丈夫ですわ。あんな黒兎より私が優しくしてあげますわ」

何を!?

「大丈夫ですわ。痛いのは最初だけですわ」

だから何で!?

そして、セシリアは俺の頭をその細腕からは想像できない力で締め上げる。

へ、ヘッドロック!?

ソレ寝技違う!!

締め技だ！！

しかも、俺の頭がセシリアの胸に当たってる！？

「セシリア！！ 痛い！！ 痛い！！ 後、胸が当たってる！！」

「当たってるではありませんわ。当たってますのよ！！」

確信犯！？

「ム、今度は締め技か、いいだろう」

よくないから！！

ラウラそれは俺の体と心によくないから！！

誰か助けて！！

俺の心の絶叫が届いたのかは定かでは無いが突如、扉が蹴破られる。

「五月蠅いぞ！！ ザラ！！ 休日騒ぐなとは言わんが今は朝だぞ！！ 考えて……」

織斑先生がそんな事言いながら入ってきて途中でその言葉が止まった。

「まあ、まあ、織斑先生、折角の日曜ですし、ザラ君もたまには騒ぎた……」

山田先生も途中で言葉が止まった。

何でだ？

そして、俺は今の状況を客観的に見つめる機会に恵まれた。ソレが良いか悪いは別として。

先ず、俺の格好、半そでのTシャツに短パン。

セシリアの格好、ブラとショーツとニーソ姿。

次、ラウラの格好、スツ裸。

何処の誰が如何見ても乱交です。

本当に有難う御座いました。

と言う場合ではない！！

(不味い、不味い、不味い！！ コレは非常に不味い！！ 俺の学園での評価が女子生徒を二人連れ込んで乱交したなんて事になる！！)

俺は一瞬で体中の血の気がコンマ1秒で引いた。

「……………ザラ、私は言ったな……………淫行をするな……………」

「織斑先生、違ってます！！」

第16話 アスラン二人と仲直りする

俺は暫く、セシリアとラウラと口を聴かなかった。

向うから話しかけられても無視した。

それでも来るならプレッシャーを放って追いついた。

一応、織斑先生と山田先生の誤解は解けたが、俺の腹の虫が納まらない。

様は腹が立った。

唯それだけだ。

我ながら子供臭いと思うが正直、彼女達は悪乗りした挙句、謝りもしない。

もう、ガキじゃないんだ。

謝る事くらいしろ。

俺は彼女たちが自分から謝るまで話をしないと決めた。

アスランを怒らせた。

元を辿ればあの女が原因とは言えそれに私も乗ってしまった時点で同罪だろう。

私とあの女の心は今深海よりも深く沈んでいた。

「どーしたのよあんた達……何か無茶苦茶空気が悪いわよ？」

鈴さんの指摘も最もだ。アスランは明らかに今は触れるもの全てを切り裂く刃の様だ。

「今のアスラン、正直おっかないぜ……俺が話し掛けても斬られるかと思っただぞ」

「夏さんもそう言っくらい今のアスランは怖い。」

「明らかにフル無視だね……正直、見てるこっちが辛いよ……」

シャルロットさんの言葉に益々申し訳なさがこみ上げる……

「……………」

何も言えない私達。

「で、アスランが怒っている原因は何だ？ あのアスランがキレるくらいだ。お前等一体何をした」

篝さんの言葉に私とあの女の肩がビクリと跳ね上がる。

その様子を見た一夏さんが溜息を吐きながら言う。

「その様子だと原因は自分達で自分達はその非を認めている。」と

その通り、余りにも余りな理由に私達は泣きそうだった。

我ながらどうしていいか解らない。

あの女と一緒に私はマイスターを怒らせた。

確かに私が凶に乗っていた事は認める他無い。

しかし、問題はマイスターの怒りを如何静めるかが問題だ。

私は今までこう言った人間関係が無かったせいかどうしてよいやら解らない。

如何すればいい。

俺は織斑先生に呼び止められ、急遽、相談室で話す事になった。

俺は出されたお茶を啜りながら無言を貫く。

その様子に織斑先生は溜息を吐いた。

「おい、ザラ。怒る気持ちは解るがいい加減あの二人を許してやれ。正直、見てるこっちが辛くなる。確かにあいつ等はやり過ぎた。でも、今のお前はらしくないぞ?」

俺は湯飲みを置くと溜息を吐きながら言う。

「別にもう怒ってはいません。確かに呆れて物も言えませんがその事で怒っているんじゃないんですよ。俺は……」

「じゃあ、何に対して怒っているんだお前は?」

俺は急須を取りお茶を注ぐ。

「俺が怒っているのは今回の件で彼女達に御免なさいとか申し訳ないとかの言葉を聞いていないことです。悪い事をすれば謝る。常識でしょう? それを出来ない彼女達に呆れと怒りが湧き起こったんですよ。もう、子供ではないんです。自身の過ちを素直に認めて謝り、次の糧にするのが大人と言う物です。貴女にとって俺を含めて彼女達や一夏は子供でしょうが俺にとってあいつ等はもう大人として見ている」

その言葉に溜息を吐く織斑先生。

「あのなザラ、あいつ等はガキだ。確かに凶体は大人に近付いてるがその精神は幼い。ハッキリ言ってお前の求めているのは大人の私達でも中々出来るものではない」

「先生、大人の条件って何だと思えます？」

その問い掛けに考える織斑先生。

「また、難しい質問だな……」

「俺はこう思うんですよ……自分が出来る事としたい事を理解してそのギャップを埋める為に努力をし、自身に掛けられた責任と義務を理解して行動出来る者、そして、自分の行動に勇気と誇りを持つる者を大人だと俺は思います」

それだけの事だ。

「言うのは簡単だな。だが、ソレを実行するのは途方も無く難しい」

「確かに、社会のシステムでは個よりも集団が求められますから……でも、その集団が形成される要素は個が集まったものだ。貴女だって、自身の職業に誇りを持っているのでしょうか？ それに、自身の行動に責任を持つている。そして、出来る事の範囲で自分がしたい事をしている。だからこそ集団でも個が必要なんですよ。そうじゃないと人は機械になるしかなくなる」

俺は茶を飲みながら一息入れる。

「まあ、結局は彼女達を選ぶべき問題です。彼女達も悪気は無いんだし。何時も通り付き合いますよ。でも、ソレをするにも常識的な

事を済ませてからですね」

俺はそう言いながら俺はこの話はお仕舞いと立ち上がる。

俺が、相談室を出ようとし振り返りながら隣の部屋に行く戸に語りかける。

正確にはその向こう側にいる2名に。

「俺からは以上だ。もし、謝る気があるなら俺は何時でも待っている。話はそれからだ。パートナーと弟子」

千冬は溜息を吐きながら言葉を述べた。

「だそつだ。盗み聞きしている小娘共」

その言葉にセシリアとラウラがスゴスゴと出てくる。

「良かったな、アイツにはお前等は大人として扱ってくれるんだと。少なくとも私からすれば小娘だがな」

「……………」

セシリアは俯き加減に、ラウラは如何したら良いのか解らない表情で無言を貫いた。

それに構わず千冬は語る。

「少なくともアイツは礼儀の話をしているだけだ。で？ お前等は如何したい？」

その言葉にセシリアは答える。

「私は……やり直したいです……あの人は……こんな私をまだパートナーと言ってくれたのですから……」

ラウラもどうにか自分の想いを言葉にした。

「私自身、人との付き合いが無かっただけに謝り方が解りません……でも、あの人は私を弟子と言ってくれた……その想いに私は答えたい……」

ソレを聞いた瞬間、千冬はヤレヤレと言わんばかりに溜息を吐いた。

「なら、謝ってこい。自分なりの言葉と想いで。ザラはソレを受け止める器だ」

「はい……」

そう言いながら2人は覚悟した様な目をして出て行く。

「全く、ザラめ……面倒事を押し付けおって」

そう言いながら生徒が成長する姿が嬉しい千冬だった。

俺は取り敢えず教室に戻る。

もう皆、部活にいていない放課後の教室で俺は窓際まで歩く。

丁度、西日が校舎を照らし教室をオレンジ色に染め上げていた。

その時、気配が二つ。

黒板側の引き戸が開いた。

セシリアとラウラだ。

俺はあくまで無言を貫いた。

「あの、アスラン……」

「マイスター……あの……」

「なんだ？」

俺は怯えながらも俺を呼ぶ二人に冷たくあしらう。

「」「ゴメンなさい！」「」

二人はそう言いながら頭を深く下げた。

始めからソレが出来ないのかと説教したくなつたがソレを何とか押さえ込んだ。

その代わりに、俺が出来る笑顔を2人に向ける事にした。

「もういいよ。そんなに怒ってない」

俺はそう言いながら彼女達の頭を優しく撫でた。

私は嬉しかった。

久方ぶりのアスランの笑顔がまぶしくて、嬉しくて……
気が付いたら泣いていた。

本当は怖かった。

アスランに嫌われるのが、パートナーを解消されるのが。

でも、自分の小さなプライドが邪魔をして自分が悪いのに謝れない
自分が嫌だった。

でも、謝れた。自分の間違いを認める事が出来た。
そしてやり直せた。

だから、その怖さや嫌さ以上にこのアスランの笑顔が私は嬉しかった。
た。

なら、この女とそれを分け合うのも悪くない。

なぜなら、この女は私の恋敵ライバルなのだから……

マイスターの笑顔は温かい。

その暖かさが私の心に染みた。

私はまたマイスターに強さを教わった。

自分が失敗した事を恐れて、それが認められなくて謝れなかった。それ以上に私はマイスターから破門される事を恐れた。

でも、私はそれを認めることが出来た。

そしてまたマイスターが乗り越える力をくれた。

そして、その報酬がマイスターの笑顔なのだ。
最高だ。

惜しむらくはあの女とこの報酬を分け合う事くらいだ。
だが、ソレも悪くは無いと思える自分がいる。

なぜなら、この女は強敵セシリアトモなのだから。

何か、知らんが俺の腕を掴みながら睨み合う二人。

この前の激戦ではなく何と云ったら言いか、表現は出来ないが何かライバルを見る目だ。

そう、俺と模擬戦をする時のキラの目に似ている。

強敵でありながらその実力を自分が誰よりも評価している。

そう言った眼だった。

何とも微妙な空気だ。

「アスラン、一緒にお食事に参加しましょう。丁度、お腹がすきましたの?」

宜しくて?

上目遣いで俺に問いかけるセシリア。

「ム……マイスターは私と食事を取るそうだ。さすが我が師だ。弟子を大切にする」

俺、一言も言っていないんだが?

「ムムム……アスランはパートナーである私と“一緒に”食事がしたいと言って降りますわ」

そう言いながら俺の腕に絡ませた腕の力を強めるセシリア。

「又グググ……マイスターは弟子たる私と“どうしても一緒に”と

の事だ」

ラウラもそう言いながら俺の腕に絡めた腕に力を入れる。

「ああ、もう！！ いい加減にしろ！！ 皆で一緒に食べればいいだろう！？ そんな事で揉めるな！！」

俺はそう叫びながら二人を振り払う。

その瞬間、二人は泣きそうな顔をする。

だ~~~~~もう！！

「いくぞ、二人とも！！」

そう言いながら俺は両手をセシリアとラウラの前に差し出した。

「エスコートだ。いやなら引つ込めるが？」

その問い掛けに二人は高速で俺の手を握った。

全く……世話が焼ける。

俺は自分の甘さと彼女達の反応に溜息を吐きながらも

そんな自分と彼女たちが嫌いじゃない自分がある事に気が付いた瞬間だった。

第17話 アスラン買い物をする

俺と一夏は車に乗り込んで市内に買い物に出ていた。

臨海学校の為に水着やらなにやらと買わなければならないからだ。

「しかし、何と云うか……流石に女子だけの空間から解放されるのは気が楽だぜ」

一夏の言葉には俺は頷く。

正直、あの乙女空間に俺も少し辟易していた所だ。

たまには何も考えずハンドルを握るのも悪くない。

「全くだ。俺も久しぶりに運転するからな。コイツも走らせないと」

俺はそう言いながらハンドルをノックした。

確かに、ISの飛行も悪くないがこうして車で地上を走るのも好きだ。

コイツは電気自動車、俺達の世界のエレカに相当するものだ。

まあ、俺の趣味でバッテリーをパワーエクステンダーに変えたのは

秘密だ。

後、足回りも少しいじっている。

それ以外は如何と言う事はない普通の車だ。

「まあ、今日一日羽を伸ばそう。明日の臨海学校は疲れそうだ」

俺はそう言いながらハンドルを切る。

「確かに、でもアスラン、それオジさん臭いぞ？」

「言うな」

俺達が市内に到着すると俺は車をパーキングに止めて歩き出した。

まあ、何処にでもある駅一体型大型ショッピングモールだな。

その様子に俺はオーブをふと思いつく。

望郷の念が無いと言えは嘘になる。

あの国と世界を守る。

俺はその使命を胸に軍に籍を置いていた訳だが、今は学生をしている。

帰る手立てが無い以上この世界で生きていかなければならず。また、あの世界に戻っても俺は訓練中行方不明、まあ、訓練中事故死扱いだ。死人がフラリと戻ってきてても居場所が無いのも確かだ。

何と、中途半端なんだろう。

この世界でもあの世界でも。

だからこそ、俺に明確な答えを見つかるまで現状維持だろう。

それも、時間が無い。後2年と数ヶ月で俺の進退を決めねばならないのだから。

「何難しい顔してんだよアスラン」

その言葉に俺は思考の海から引き戻される。

いかな、考え事していると直ぐ周りが見えなくなる。

俺の悪い癖だ。

「いや、ただ、今後の進路を考えてな……俺は如何すべきかと」

その言葉に一夏は苦笑する。

「アスランだったら引く手数多だろうけどな。頭いいし、強いし、行動力あるし、深慮深いしさ」

「そうでもない、俺は弱いよ。グルグル回って考えが纏まらず誰かに流されて、ようやく自分なりの答えを見つけたと思ったたらまた考

えてを繰り返してる」

だが、それもいい。

思考を停止して何かに没頭するより、立ち止まり考える方が時にはいいのかもしれない。

俺は、多分、探し続けるのだろう。

俺なりの答えを納得できないまま、迷いながら、彷徨いながら。

何時たどり着けるか解らない道を歩きながら。

一人孤独に。

何と言う事だ。

俺は一夏達に共に歩む大切さを説きながら自分は一人で歩いている。

何たる矛盾だろう。

そんな私が一夏達を偉そうに導いている。

何たる道化だ。

だが、それもいいだろう。

一夏達若い者達が大きくなる土壌を俺は作るべきだ。

その為なら道化を演じるのも吝かではない。

だが、自身から湧き上がる衝動が無い。

これは自身に課すべき義務を淡々としているに過ぎない。

なら、俺の身の内から湧き上がる衝動とは何だ？

そうか……俺は人の可能性を、人の心の温かさを俺は一夏達に教え
たかったんだ。

一人では成せない。多くの人々の願いが集まって初めて出来る可能性を
何時かやがて何時かわと言いながらも届かなかった可能性。
ソレはとても近くて、とても遠い可能性。
未来を夢見る可能性。

俺はそれを一夏達に見せてやりたい。
人々の祈りに似たそれは美しい。

ラウ・ル・クルーゼが否定し、ギルバート・デュランダルが諦めた
ものを俺は彼等に見せてやりたい。

ならばSEEDとはその為にあるのだろう。

ジョージ・グレーンはコーディネーターを新たなる人類と古き人類
との架け橋であるべきだと言った。

なら、SEEDとはその新たなる人類へ古き人類を導く可能性。

俺はそれに賭けよう。

俺はそんな事を考えながら一夏とシヨッピングモールを歩いた。

私は箒さん、鈴さん、シャルロットさん、そして、ラウラと一緒にアスランを尾行しています。

「ねえ、アレ……何だか楽しそうじゃない？」

鈴さんは何だか目が虚ろになりながらそんな事言ってます。

「そうだね……」

シャルロットさんの目が赤くなっているのは気のせいだと思いたいですわ。

「一夏め……！！」

箒さん。何竹刀袋から真剣を出してますの？ 銃刀法違反ですわよ？

「セシリア、何故サブマシンガンを握り締めている？」

その言葉に私はH&K HK53A3（サブレッサー、近距離狙撃スコープ付）を背中に隠しながら細目をしてラウラに問い掛けます。因みに弾丸は対暴徒鎮圧ゴム弾ですの。

「ラウラこそ、その手のグレネードランチャーとナイフは何ですの？」

ラウラも右手のアームスコームGLとコンバットナイフを背中に隠します。

弾の種類からスタングレネード弾であろう事は解りますわ。

「私はただ、アスランによからぬ虫が付かぬ様監視ですわ。そう、パートナーの義務ですわ」

「私はマイスターに纏わり付く弟子が愚考をせぬか監視しているだけだ」

(隙あらばラウラを狙撃ですわ)

(隙あらばセシリアを砲撃する)

「あら、そうでしたの、おほほほほ」

「ウム、そう言う事だ。ははははは」

どうやら考えている事は同じですわね。

チィ、ですわ……

こうなったらラウラへの闇討ちは諦めて私がアスランから教わった知識を駆使してラウラを出し抜きますわ!!

おのれ、セシリアめ、考える事は同じか!!

こうなったらマイスターを尾行して何らかの方法で一夏を引き剥がし、私がセシリアより先んじなければ!!

「セシリア、提案だ！！」

「何ですのラウラ？」

「ここは一時休戦としたい。まずは弟弟子の一夏を引き剥がす事が先決だ」

セシリアは暫し考えた後頷く。

「宜しくてよ。ラウラ。一時休戦ですわ」

(フツ、馬鹿め。出し抜いてやる)

(フツ、愚かですわ。この私を出し抜けると思ってた?)

俺は一夏と離れて一人紳士水着売り場に足を運んでいた。

どうやら一夏個人的な買い物があるらしい。

余り、俺はそんな水着に拘りがないのか適当にトランクスタイルの水着を見繕った。

会計を済ませた俺がショップから出ようとした時、セシリアがいた。

「あら、アスランではありませんか。奇遇ですわね」

「セシリアこそ、水着を買いに？」

俺の言葉にセシリアは微笑みを湛えて俺の質問に答えてくれた。

「ええ、新しい水着を新調しようかと。よければアスラン、お付き合い願いませんか？男の人の意見も是非取り入れたいのですけど」

まあ、いいだろう。

そう思いながら俺はセシリアのお誘いを了承した。

よしですわ！！　よしですわ！！　よしですわ！！

アスランの曰ごろの正確をよく知っている私だからこそ出来る作戦ですわ！！

まあ、見失ったふりをしてラウラを引き離し、アスランのいそうな所を探しました。

アスランの場合、目的以外の買い物はしませんわ。

つまり、明日は臨海学校。

つまり、水着を買うか旅行セットを買うくらいですわ。

案の定、アスランは紳士水着売り場にいました。

しかも、支払いを済ませている。

私は偶然を装いアスランに声を掛け、尤もらしい理由でアスランと買い物。

抜かりはありませんわ!!

そうして、着いた婦人用水着売り場、男連れのカップルと周りには写ったことだろう。

耳を済ませると、

「あ、あれ、あの金髪の子の横にのってアスラン・ザラじゃない!?」

「嘘!? 赤い騎士王!? マジ!?!」

「嘘!? じゃあ、ザラ様の横にのって彼女!?!」

「まさか今フリーでしょ?」

「雑誌や動画で見るよりカッコいいわね」

私たちは周りの喧騒を他所に水着を選び始めました。

アレヤコレやと選ぶうちにセパレートの付いたホルタービキニの水着に決まりました。

「青か、セシリアのパーソナルカラーだな」

アスランの微笑みについてクラツときてしまったのは私だけの秘密ですわ。

その時だった。

よりによってラウラが入店してきた。

不味いですわ！！

私は条件反射でついアスランの腕を掴んで更衣室に滑り込みました。

226

チツ！！ セシリアに一杯喰わされた。

忘れていたがああな女はマイスターから直々にその戦術と戦略を教わっていた事を不意に思い出す。

「クソ」

私は吐き捨てる様にそう言つとある2人の女達の会話が聞こえてきた。

周りの兵達が囃し立てるがクラリツサ沈めてくれたようだ。

「実は今度、臨海学校と言うものに行く事になったのだが、どのような水着を選べば良いか選択基準が解らん。そちらの指示を仰ぎたいのだが」

その言葉にクラリツサは明確にそしてハッキリと答えた。

『了解しました。この黒兎部隊は常に隊長と共にあります。因みに、現在隊長が所有しておられる装備は？』

その問い掛けに私は答える。

「学校指定の水着が1着のみだ」

その言葉を聞いた瞬間、クラリツサは唸り声を上げた。

『グウ……何を馬鹿の事を！！確か、IS学園は旧型スクール水着でしたね！？ ソレも悪くはないでしょう。だが、しかしそれは……』

「それでは？」

『色物の域を出ない……！！』

「ならば、如何する！？」

『フツ、私に秘策があります』

そう言うとクラリッサの指示で私は写メールを送りながら検討した。

まあ、何と云うか、俺は無事、一夏と合流できた、しかし、しかしだ。

何故に筈と更衣室に入っていたのかは謎である。

そして、俺もセシリアと更衣室に入っていたのも謎である。

そして、四人横一列に並んで正座させられ、山田先生に説教されている今の状況は果てしなく謎である。

俺はセシリアに連れ込まれただけなのに……

後、織斑先生、何溜息吐きながらコイツ等ならありえると思っっているのですか？

小1時間ほど問い質した。

そして、デバガメ2名と我が弟子。

出て来い。

そんなこんなで俺は車を取りに行く事にした。

一夏は筭、鈴、シャルロットと帰る為、電車だ。

そして、何故かナビシートに誰が座るかセシリアとラウラが揉めていた。

「ここはパートナーである私の席ですわ!! ラウラは後ろにおいて来なさい!!」

「貴様こそ!! その席は弟子たる私の席だ!! どけ!!」

「いい加減にしろ!! 五月蠅いぞ!! お前等後ろに乗れ!!」

俺の怒声に渋々答える形でセシリアとラウラは後ろの席に乗り込んだ。

全く……前途は多難である。

第18話 アスラン天災科学者と出会う

俺達IS1学年は1学期最大行事である臨海学校に来ている訳だが。

「アスラン、泳ぎましょうよ」

セシリアは俺の右腕を引っ張る。

「マイスター、あちらで遊びましょう。さあ」

ラウラは俺の左腕を引っ張る。

「俺の体は1つしか無いんだぞ？」

俺は呆れながらもどうにかセシリア達を振り切り、ビーチパラソルの下でユツクリと昼寝する事にした。

まあ、最初、俺の水着姿を見た女子が息を呑んだのはこの体全体の傷で驚いているのだろ。

仕方ない、俺も戦争やら訓練やらやら怪我をした。

肩の銃創など父に撃たれた怪我だし、カガリに撃たれた？ 怪我もある。シンに撃破された傷も未だに残っているしな。

しかし、俺が思っている事とは違う回答が帰ってきた。

「アスラン様、マジイケメン!!」

「わ〜アスにゃん筋肉凄いね〜」

「あ〜駄目、鼻血でそ……」

とか変な印象しか無かった。

まあ、そんなこんなで食事は騒がしかったがまあ、お開きとなった。

俺は山田先生の部屋で先生と布団を並べて寝ることになった。

まあ、女子生徒対策だ。

俺が襲われると思っているのかそれとも襲うと思ったのだろうか？

まあ、対策としてはいいだろう。

そんな中何か隣、織斑先生と一夏の部屋が騒がしいがまあいいか寝よう。

千冬は一夏に飲み物を買に行かせている隙に何時もの5人と話していた。

「ウグウグ……プハ~~~~~」

何か親父臭いがまあ其処は言わぬが賢明だろう。

「如何した？ 何時もは馬鹿みたいに馬鹿騒ぎするお前等が大人しいじゃないか？」

その言葉にシドロモドロになる5人。

「いや、あの……」

「こうして織斑先生と話すのも初めてかな」と

箒とシャルロットの言葉に興味無さそうに答える。

「まあ、いいそろそろ感じんな話をするか……」

そう言いながら千冬はビールをまた煽る。

「で、お前等、あいつ等の何処がいいんだ？ まあ、確かに一夏は料理も上手いしマッサージも得意だ。あいつの女になる奴は得だな。ザラはアレでいて一夏より遙かに気が回るし、頭もいいし更に強くて優しい。18にしてはそこら辺の大人より大人をしている。お前等から見れば、俗に言う最優良物件って奴だ。文字通り値段は高いが最高の物件だな」

その言葉にセシリアとラウラは赤くなりながらも誇らしそうな顔をした。

「まあ、一夏はやらんが、ザラは自分で自分の生き方を選択出来る

大人だ。オルコット、ラウラ。アイツの一番近くにいるお前等としては早く売却したいだろうが、今のお前達ではザラとつりあいが取れていない。まあ、女を磨け。そう言うことだ。ガキがブランド物持っけていても美しくはなれん。自分がブランドに負けない女にならないとブランドが目立つからな」

セシリアとラウラは落ち込んで頷くしかなかった。

俺と一夏達は織斑先生の指導の元、訓練を行う事にした。

「よし、専用機持ちは全員揃ったな」

その織斑先生の言葉に鈴が質問した。

「チョット待って下さい。筈は専用機を持ってないでしょう」

「それは……」

その言葉に筈は言葉が詰まるが、織斑先生は説明に入る。

「ソレは私から説明しよう。実はな……」

織斑先生がそれを言おうとした時、突如女性の声が響く。

「やつほおおおお~~~~~!!!!!!」

その声に篝と千冬がゲンナリとする。

「ち~~~~~~~~~~ち~~~~~~~~~~ん!!!」

突如、女性が崖から滑り降りながらハイジャンプをして織斑先生に抱きつこうとした。

何だ!?

しかし、織斑先生は寸前の所でその女性をアイアンクローで押し留める。

「やあ、やあ、逢いたかったよ！ チイちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛をたしかめ……」

女性が言葉を全て言い終わる前に千冬は指の力を強めながら言う。

「五月蠅いぞ、束」

その辛辣な言葉にもめげず女性は尚も抱きつこうと試みながら言う。

「相変わらず容赦の無いアイアンクローだね」

そう言うのと今度は、岩陰に隠れた篝の所に移動する。

「ジャジャ~~~~ン！ やあ」

そう言いながら両手を広げ挨拶をする女性。

「ど、どうも……」

箒もたじろぎながら挨拶を返す。

その様子を見ながら俺達は取り残される形となった。

正直、女性のハイテンションに付いていけない。

そんな中、箒と女性とのやり取りに一夏も強制的に参加させられそうになった所を織斑先生が止めた。

「オイ、束。自己紹介くらいしろ」

その言葉に女性は面倒臭そうに、いや実際、面倒臭く言い放つ。

「え、面倒臭いな」

そう言いながらも女性はポーズを決めながら自己紹介をする。

「私が天才の束さんだよ。ハロー。終わり」

その言葉に驚きの声と顔をする4人だが、俺は、ああ、ヤッパリと
言う感想が強かった。

そして、一夏の機体、白式の開発者の正体もこの時解つたのだ。

(やはり、一夏のISの操縦者は篠ノ之博士か……)

織斑博士は突如上空を指差しながら言い放つ。

「さあ！ 大空をご覧あれ！！」

そう言った瞬間、何か重たい物が落下する音が辺りから響いてくる。そして、菱形の金属が岩場に突き刺さった。

そう言いながら篠ノ之博士はリモコンを押しながら言う。

「ジャジャーン！ コレが篝ちゃん専用機こと紅椿！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製だよ」

その言葉に俺以外啞然とする。

「なるほど、機体に展開開放スペースがあるな。多分、展開装甲だろう。展開装甲の展開する根元の装甲が厚いな。多分、熱量兵器を搭載しているのだろう」

俺は紅椿を見ながら顎に手をやり呟く。

「装備の換装無しでの全領域、全局面展開運用能力の獲得を目指した第四世代ISか……多分、白式の運用データを下に開発されたんだろう。差し詰め、白式の妹機といった所か。それなら白式を発展させた。或いは白式との連携を主眼に置いた運用が目的だろうな」

その俺の言葉に感心しながら篠ノ之博士は俺に質問してきた。

「へ〜よく解ってるじゃないか！ 赤い騎士王くん。君のインフィニット・ジャスティス見せてくれるかな？ 凄く興味ありだね」

その言葉に俺はこう答えた。

「お断りします」

そのアツサリとした否定に篠ノ之博士と織斑先生以外の全員が驚いた。

「何でかな？」

その問い掛けに俺はこう答える。

「悪いが、俺の機体には作り手の想いと祈りが込められている。ソレを赤の他人に渡す訳が無いだろう。それに、貴女では無理です」

「そう言うこと？」

「ジャステイスには高度なセキュリティロックが何重にも張り巡らされている。解析は不可能でしょう」

その言葉に篠ノ之博士は挑戦的な笑みを湛える。

「じゃあ、ロックを解除したら見せてくれるかな？」

「いいですよ？ 解除できたら」

そう言う俺はジャステイスを展開する。

そして、博士はスカートからケーブルを取り出す。

ソレがジャステイスのコネクターにつながる。

「じゃ、解析するね？」

そう言いながらキラと同じくらいの速度でタッチパネル型キーボード、多分自作だろうを操作していくが開始20秒で博士は行き詰った。

「何よコレ~~~~~激難じゃん！！ 防壁が高度すぎて理解不能だよ！！ 更に何これ！？ 量子コンピューター！？ コレ自体が超小型で超高性能の量子コンピューターを積んでるの！？ コッチのコンピューター要領を全てつぎ込んでも足りない！？」

そう言いながらも何とか解こうとするが。

「げ！？ トラップ！？ コッチのコンピューターが汚染されちゃっ！？」

そう言うと博士はジャステイスに繋がれていたコードを無理やり引っっこ抜く。

それは博士にとって屈辱だろう。

「ね？ 貴女じゃ無理でしょ？」

そう言われた博士は悔しそうに問い詰めた。

「ねえ！！ アレ開発したの誰！？」

「ハードは俺でソフトは親友です」

それを聞いた瞬間、博士はマジマジと俺を見た。

「あんな超高性能で私でも再現が不可能なハードを君が!？」

「ええ、まあ、ジャステイスのハードは俺の最高傑作ですから。まあ、機体も俺に合わせて作られていますし」

そう、一旦俺がハードをバージョンアップする時、俺が開発したハードが使われていた。

しかも、キラが俺に頼み込む形で開発したハードはストライクフリーダムにも積まれている。

ソフトもキラが全力を傾けて作った最高傑作だ。

俺も何度か挑戦したが1000回に1回しか成功しない鬼畜な設定だ。

ソレこそ、物理的にクラッシュさせるしか如何しようも無いくらい高度なセキュリティと防御ウイルスが満載されていた。

「ツと、いけない、いけない。今は愛しの篝ちゃんの紅椿を完成させる事が先決だった」

そう言うと博士は新しいコードを紅椿に取り付けると高速でタイプする。

そして、全てが終わり、篝が試運転を終了させた時だった。

山田先生が大急ぎで走りながら携帯を織斑先生に見せた。

何やらいやな予感がする。

俺は篠ノ之博士の笑顔を見てそう思った。

第19話 アスラン戦場を駆ける

俺達は一時、旅館に戻り対策会議を開いた。

織斑先生は立体投影ディスプレイの前に立って事件のあらましを話す。

「今から2時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ、イスラエル共同開発のIS、シルバリオゴスベル、通称、福音が、制御下を離れて暴走、監視空域より離脱したとの連絡があつた」

その言葉に全員の緊張が走る。

織斑先生は詳細を説明する。

「その後、衛星での追跡の結果、福音はここから2キロ先の空域を通過する事が解つた。時間にして50分後。学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処する事になった。教員は訓練機を使用し、空域、海域の封鎖を行う」

アメリカとイスラエルは何をやっている。

と、責めたい所だが軍用第二世代型ISと軍用第三世代型ではスペックの差が激しいか。

本来であれば教師の部隊が派兵されるのがセオリーだが明らかに速度が尋常ではない。

ジャスティスには及ばないがそれでも現行のISより速い。

そう言うと畳の上の画面は教員の配置を表示する。

「よって本作戦の要は専用機持ちを担当してもらおう」

「はい？」

その言葉に一夏は驚きの声を上げる。

その言葉にラウラは律儀に説明をする。

「つまり、暴走したISを我々が止めると言う事だ」

その言葉に更に驚く一夏。

「マジ!？」

「一々驚かない」

鈴に窘められる一夏。

それに構わず織斑先生は作戦会議を開始した。

「それでは作戦会議を始める。意見のある者は挙手する様に」

その言葉に一番先に手を挙げたのはセシリアだった。

「ハイ、目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「ウム、だが、決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも2年の監視がつけられる」

セシリアはソレを聞き淀みなく答える。

「了解しました」

その瞬間、正面ウィンドーに福音の詳細なデータが浮かび上がる。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……私のISと似てオールレンジ攻撃が可能ですわね……」

差し詰め戦闘機並に超高速機動が出来る爆撃機か。

その言葉の鈴も頷きながら答える。

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ……」

その言葉にシャルルも自分なりの分析を言う。

「この特殊武装が曲者って感じはするね……連続しての防御は難しい気がするよ」

ラウラは顎に手をやりながら考えるように呟く。

「この情報では格闘性能は未知数だ。偵察は行えないのですか？」

その質問に千冬は否定するように言う。

「ソレは無理だな。この機体は超音速飛行を続けている。アプロー

チは1回が限界だ」

その言葉に今まで黙っていた俺が拳手をする。

「何だザラ」

俺は手をゆっくり下ろすと言葉を紡ぐ。

「アメリカ軍、及びイスラエル軍の両軍の作戦参加は？」

その言葉に織斑先生がこう言う。

「福音暴走時、両軍の艦隊が福音に沈められた。死者は出ていないが、作戦行動は困難との事でIS委員会に福音の捕獲、捕獲困難の場合撃破を依頼、IS委員会議長が緊急特例措置として議会承認をスキップして福音に近い私達がこの任務に当たっている」

アメリカとイスラエルも思い切った事をしたな。

自軍撃破で太平洋艦隊が壊滅した事を公言する様な物だ。

俺は次の質問をした。

「ジャステイスのリミッターの解除は何処まで承認されるのでしょうか？ 全解除していただけるなら“撃破”は可能です」

その言葉に織斑先生は頭を抱える様に言う。

「いいか、ザラ、お前のISは高性能すぎる。確かに全リミッターを解除すれば福音の撃破は確実だろう。だが、忘れていないか？

これはIS委員会の正規の任務だ。もしここでお前が本気を出せばこぞつてお前とお前のISを獲得する為に動くだろう。最悪戦争だ。出来たとしても速度解除までだ」

その言葉に俺は噛み付く。

「しかし！！ 人命が掛かっているのですよ！？ せめて後、シールドエネルギーのリミッターだけでも！！」

それでも織斑先生はリミッター解除を考える。

「解った……PICとシールドエネルギーと装甲のリミッターは解除する。しかし、後の機体機能は解除不可だ」

それだけで十分だ。

「了解」

そう言いながら敬礼をした。

「ザラ、多分、お前の事だから最大出力でイグニッションブーストを機動して一気に距離を詰めれるだろう。足止めを頼む。一夏達が到着しだいアスランの指揮下に入り戦闘を開始する」

「……はい」「」

「了解」

俺達は其々答えると俺は立ち上がり、詳細なポジションと訓示を述べる事にした。

「今回は強襲作戦だ。速度と打撃力を重視する。よって、本作戦の参加は俺と一夏と箒の1小隊が担当する。先ずは俺が最大加速で福音に接敵、然るべき後に一夏と箒が到着まで足止めと陽動を行う。一夏達が到着後俺と箒が2マンセルで足止めしその隙に一夏が零落白夜で止めを刺す。それが本作戦の概要だ」

俺はそう言いながら一夏と箒を見る

「いいか？ 一夏、箒、これは実戦であり訓練じゃない。最悪の場合、“戦死”だ。作戦参加の強制はしない。それでも、戦うと言うなら。俺の指揮下に入ってもらおう」

いいか？

俺の言葉に一夏は握り拳を作り強く頷いた。

「ああ、やろう！ アスラン！」

箒も頷きながら答える。

「無論だ。任せろアスラン！！」

さて、久しぶりの実戦だ。

気を引き締めるぞ。

俺は一夏達を遠目に見ながら物思いに耽っていた。

「その様子だと、本心は大反対だが状況が状況だけに決断するより他無い。と言った所か」

織斑先生の言葉に俺は苦笑しながら頷くしかなかった。

本当にこの人は生徒の事を良く見ている。

「ええ、結局、“戦場”に彼女達を放り込むんですから…… 15の子供を戦場に放り込むなど俺達大人の無能の極みですよ」

「だが、奴等は戦う事を選び、専用機持ちとなった。本人が選択した事だ」

その言葉に俺は頷くがでもコレだけは言っておきたい。

「戦場に出れば討つか討たれるかの境界線しかない。戦場は、一夏達が思っているほど綺麗でも甘くも無い」

その言葉に織斑先生が反応した。

「その言葉から察するに、実際に戦場に出た事があるのか？」

その言葉に俺は頷く。

「ええ、俺が最初から参謀本部の准将な訳が無い。言い方は悪いですが、階級に見合うだけに敵と味方を殺して武勲を立てて前の階級になった。俺は彼等とは違う。本当の意味で人殺しだ。それも、大量殺戮者だ」

「そうか、だが、今は私の生徒だ。お前はIS学園の1年1組のアスラン・ザラだ。それだけは覚えておけ」

確かに罪は消えないしその言葉を免罪符に逃げる気も無い。だが、その言葉で俺は救われた気がした。俺は唯、頷いた。

「ああ、ソレと、織斑と篠ノ之を頼む。あいつ等はお前と違って実戦を知らないからな」

「了解」

俺は敬礼をする。

しかし、織斑先生は呆れながらこう言い放った。

「ここは軍隊ではない。敬礼はいい」

俺はその言葉に苦笑して答える。

「最早癖を通り越してこれは体に染み付いています。早々直るものじゃありませんよ」

「直せ。一般人である以上敬礼など意味が無い」

至極最もだが軍人として生きた半生で染み付いた癖を如何直せばいいか解らない俺にとって織斑先生の注文は中々難しかった。

「善処します」

そう言いながら俺はタッチパネルキーボードを叩いた。

俺と一夏と箒の出撃準備が整う。

俺は一夏達に先んじてISを展開する。

ジャステイスを久しぶりに全力で飛ばす事が出来る。

俺は一呼吸吸い込むとソレを吐き出す。

「アスラン・ザラ、ジャステイス出る！！」

そう言いながら俺は空へ飛び立つ。

一気に最大加速にいたる。

そして、イグニッションブーストを起動した。

その頃、司令室では千冬と真耶がモニターを見つめる。

「は、速い……」

真耶の呟きは最早唸り声に近かった。

「イグニッションブーストの最大加速値がマツハ12……福音の六倍の速度なんて!？」

福音事態がマツハ2、スーパーソニックに分類される。

これは戦闘機が短時間維持出来る最高速度である。

その理由は長時間すると機体が自壊してしまう可能性があり、パイロットの体を持たないからだ。

ISの場合、絶対防御があるがそれでもパイロットと機体負荷を考えたら余りお勧めできない。

ISでも速い部類だ。

だが、ジャステイスのソレは明らかに異常だ。

よく機体とパイロットが持つものだ后感心する。

何せ、今、ジャステイスが叩き出している速度はマツハ12、ハイパーソニックに分類される。

このハイパーソニックはスペースシャトルが大気圏再突入する際に出る加速がマツハ5である。つまり、マツハ5以上がハイパーソニックとして分類されるが、あくまで人間がギリギリ耐えられる限界値だ。

「機体はフレームや装甲がVPS装甲ですから耐えられるでしょうが……肉体は無理でしょう……途轍もないGが体を圧迫する。下手をすればミンチだ。旋回などしようものなら人間が死んでしまう」

その言葉に真耶は慌ててアスランのバイタルデータを呼び出し確認した。

「ウン……脳波は正常、アドレナリン分泌が若干高いものの許容範囲内、呼吸、脈拍、体温異常無し!? 何ですかこのバイタルデータは!? 計器の故障ですか!？」

真耶は何度も計器の確認をしたが何処も異常は無い。

千冬は違う先生にジャステイスの機体状況をモニターに出すよう指示した。

「……やっぱりな……」

千冬はそう言いながら納得した。

「何がですか？」

真耶はその画面を呼び出し閲覧した。

ソレを見た瞬間、あり得ないと真耶は叫んだ。

「そんな！？ ウソでしょ！？ あり得ない！！ こんな事って……」

「ああ、正直、ふざけている。イグニッションブーストは本来、I Sの後部スラスター翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速する。瞬時加速の速度は使用するエネルギーに比例するものだ。使用中は加速に伴う空気抵抗や圧力の関係で軌道を変えることができず、直線的な動きになる。筈だが……ザラめ、イグニッションブースト中に機体表面にPICを展開させ機体に掛かるGを打ち消している」

「ちょ、ちょっと待ってください！？ イグニッションブースト中にPICの繊細なマニュアル操作ですか！？ 無茶です！！ 現行のOSでは不可能なんですよ！？ まして、人間の脳の処理速度を

超えています！！ 一体どれだけ複雑な並行処理をするのか検討も付きません！！ ソレにシールドエネルギーだって！！」

その言葉に、千冬は画面を顎で指す。

「現に、ソレをザラがやっています。更に言うならジャステイスだからこそ出来る荒業でしょう。ジャステイスのエンジンは核とデュートリオンと言う未知のエネルギーのハイブリットエンジンです。しかも、全世界のISを1時間でシールドエネルギーをフルに出来るふざけた出力です。何せ、零落白夜が打ち合っただけでそのエネルギーを消滅させきれず僅か1秒でパンクさせられシールドエネルギーがゼロになる」

丁度、イグニッションブーストをしながらアンバックで機動補正をしていた。

「ウソ……」

流石の千冬も呆れていた。

「ふざけたマルチタスクだなオイ。アイツがその気になったらイグニッションブーストを連続稼動して複雑な機動を行いながら戦闘出来るぞ。悪いが私には不可能だ。最早、人間をやめてるぞアイツ」

その時、アスランから通信が入る。

『此方、アスラン、ターゲットを目視で確認。交戦許可願う』

取り敢えず千冬達はアスランへの思考を脇へやり任務に集中する。

「了解です。攻撃を開始して下さい！」

真耶が通信でアスランに交戦許可を出す。

俺は福音を目視で確認する。

フツ優雅に空のお散歩か？

此方の準備は整っている。

「見せて貰おうか。新しいISの性能とやらを！」

俺はそう言いながらビームライフルを構えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9728y/>

ISアスラン戦記

2011年12月11日15時56分発行